

市民科学通信

2023 年 10 月号

(通算 41 号)

2023 年 10 月 28 日 発行

発行: NGO 市民
科学京都研究所

〒616-8012 京都市右京区谷口
垣ノ内町 5-8

嵐電・龍安寺駅北東へ徒歩 3 分
事務局 E-mail :

sigemo.nao@gmail.com

目 次

国民国家の極限と人間の自由

—岡真理『ガザに地下鉄が走る日』(2018 年)を読む—・・・中村 共一・・・02

【コラム】2023 年 10 月(神無月)、オムニバス 三題・・・重本 冬水・・・10

【コラム】レストラン「人民議会」・・・照井日出喜・・・13

NPO 活動の限界・・・塩小路橋宅三・・・14

【新書散策の旅 シリーズ第 12 回】

—大塚敦子『動物がくれる力 教育、福祉、そして人生』

(岩波新書、2023 年)から学ぶ—・・・宮崎 昭・・・16

君は君のままで・・・竹内 真澄・・・20

おじさんの歌・・・竹内 真澄・・・30

【近況短信】ファンタジーにある「古い」

—団地タクシー奮闘記「さよならだけが 人生だ」の巻—⑪・・・宮崎 昭・・・36

【ライフ・ドキュメンタリー】敗者復活ラグビーの空

—旧友らの 2 つの会で再会できた十月—・・・真島 正臣・・・38

【エッセイ】MGC 2023・・・照井日出喜・・・42

緊急声明

NGO 市民科学京都研究所は、イスラエルによるパレスチナ「ガザ地区」への大規模攻撃による多くの子どもや病人、医療関係者、ジャーナリスト、NGO、国連職員などを含む広範な市民の殺戮を非難する。10 月 7 日のハマスによる市民の殺戮・人質を許すことはできない。しかし、イスラエルによる「ガザ地区」への攻撃は自衛権をはるかに超えたジェノサイド・民族浄化であり、私たちは、攻撃の即時停止、水や食料、燃料などのライフライン復旧にかかる封鎖の即時解除、市民の生命と安全の確保をイスラエルに求める。また、イスラエルが占領していた「ガザ地区」と「ヨルダン川西岸地区」でのパレスチナ人の暫定自治を認めた「イスラエル・パレスチナ和平合意」(オスロ合意<1993 年 8 月 20 日発効>)をふまえ、あらためて平和的共存への協議を再開することを求める。

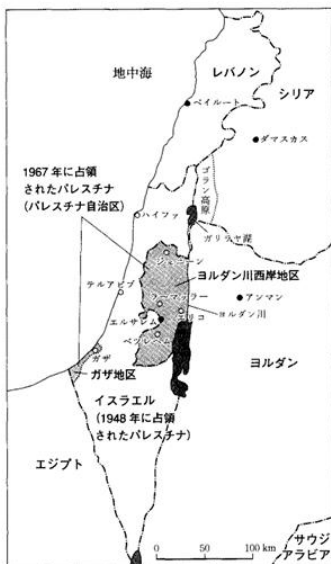
2023 年 10 月 27 日 NGO 市民科学京都研究所

国民国家の極限と人間の自由

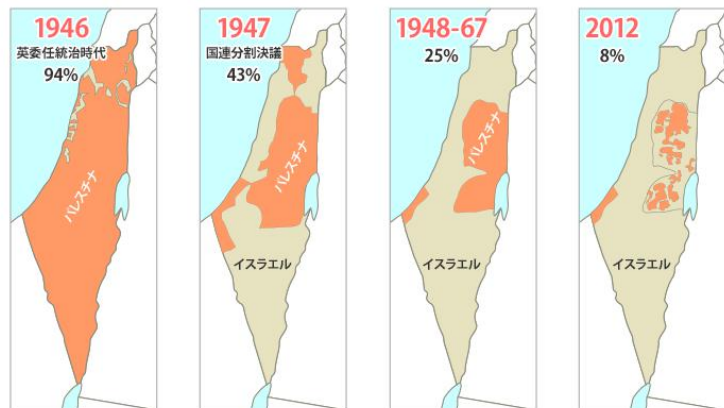
——岡真理『ガザに地下鉄が走る日』（2018年）を読む——

中村共一

- 1 辺獄のパレスチナ
- 2 ノーマンの闘い
- 3 もう一つの地獄
- 4 希望としての連帯



本書掲載地図



年代別パレスチナ地図

<http://www.jca.apc.org/~altmedka/tyuutou-palestine.html> より



2023年10月11日 BBC ニュース画像

<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-67074321> より

1 辺獄のパレスチナ

パレスチナの「ガザ」が、イスラエル軍の「集団殺戮」にあっている。多くの子供たちの死、ガザの病院爆破など、悲惨なニュースが伝えられ、イスラエルへの国際的な批判が高まっています。イラク戦争、ウクライナ戦争と同様に、ガザ攻撃には、「この世」の地獄を感じざるをえません。ことに、70年以上つづくパレスチナ難民の悲劇は、こんなことはあってはならないもの。まさに「この世の地獄」がもつ根源的な人間問題を投げかけているように思われます。岡真理さんの『ガザに地下鉄が走る日』（みすず書房、2018年）は、5年前の出版とはいえ、そのことを熱烈に伝えるものでした。イスラエル軍とハマスの銃声が聞こえてくるほどに、岡さんのリアルな文章に震え、怒りを覚えながら、読んだわけですが、そこに含まれている問題の核心は、メディアが伝えるような「テロリスト」の問題ではなく、国民国家間（パレスチナは自治政府ですが）の対立のなかで翻弄される人間の姿であり、普遍的な人間の自由の問題がある、というものです。

岡さんの文章は、パレスチナ難民の「魂」を伝える、熱のこもったものです。それを活かすべく、岡さんの文章を活用しながら、本稿を作成していこうと思います。引用が多く、また長文になりますが、ぜひ読み切ってもらいたいと思います。なお、引用文中の〔 〕は中村が付記したものです。

まずは、予備知識として、岡さんが記述するガザ・パレスチナ難民の歴史をみておきます。

ナクバ [1948年のイスラエル建国とパレスチナ難民の発生をパレスチナ側からいう語] で故郷を追われ、ガザにやって来たパレスチナ人は、国連が支給したテントで暮らし、国連の食糧配給の列に並ぶ、文字どおりの難民だった。1967年にガザが [イスラエルに] 占領されると、父親たちは妻子を養うために、20年前、故郷を占領し、自分たちを追放したその国の底辺労働者となって糊口をしのいだ。それからさらに20年の歳月が過ぎたとき、人々は占領に抗して立ち上った。インティファダ [イスラエルの占領に抗するパレスチナ民衆の一斉蜂起] だ。1967年の占領下の全土で展開された反占領の民衆蜂起を鎮めるために、合衆国の仲介で「オスロ合意」が結ばれた。それはパレスチナ側に妥協を強いるものだったが、その結果、ガザと西岸で無数のパレスチナの旗が翻った（それまでは、パレスチナの旗を所持するだけで逮捕された）。十年後、「和平プロセス」という名の占領永続化プロセスに対しても人々は再び立ち上がった（第二次インティファダ）。2005年、イスラエルはガザの全人植地を撤退させ。それにともなってガザに駐留していた軍隊も撤退する。さらに人々は「市民社会」を築いていった。2006年、パレスチナの評議会選挙がおこなわれ、国際監視団を組織したジミー・カーター元大統領も「民主的で、嘘偽りなく遂行された選挙だった」とお墨付きを与えるこの選挙で、人々はイスラエルの占領支配と共犯し腐敗したファタハに代わってハマスを選んだ。イラン・パペと並んで、イスラエルの「新しい歴史家たち」の一人と評される、オクスフォード大学のアヴィ・シュライム教授は、この選挙の歴史的意義を高く評価する。民主的な政権交代という、いずれの中東諸国もいまだ成し遂げていないことを、パレスチナ人は占領下という多大な困難のなかで実現したのだから。

1)

この文章から、パレスチナ難民の歴史が明瞭に読み取れます。が、2006年のパレスチナ評議会選挙後、ハマスの台頭に対抗し、イスラエルは、2007年からパレスチナ自治区を「完全封鎖」し、また「集団殺戮」をくり返してきました。この「完全封鎖」により、「200万の住民が監禁され、生命維持に必要な最低限のカロリーすらも供給されず、ドローンによって絶え間なく監視され、ミサイルが日常的に撃ち込まれ、数年おきに大規模な破壊と殺戮が繰り返されるガザ地区とは、今や『難民キャンプ』というよりも、むしろ『強制収容所』と呼んだほうが似つかわしい。今日を生き延びることが、明日、あるいは数年後に空爆で殺されるためでしかないような、そんな生活」²⁾が続くことになります。現在もなお、ガザのパレスチナ人は、この「強制収容所」のなかで、イスラエルの空爆を受

けているのです。

このような「砂漠の辺獄」にあるパレスチナ難民キャンプについて、岡真理さんは、その意味を、端的に次のように捉えています。

いま、この世界にあって、国を持たないということはノーマン、すなわち何者でもない者、人間ならざる者であることを意味する。国を持たざる難民とはノーマンなのだ。国民国家の空隙に落ち込んだノーマン。彼らは人権とも、彼らを守る法とも無縁だ。「法」も「人権」も、それは「人間」、すなわち「国民」の特権なのだという。国民でない者は「人間」ではない、それが、普遍的人権を謳うこの世界が遂行的に表明している紛うことなき事実であり、その事実が——彼らが「国民」ではないために「人間」ではないという事実、それゆえに人権や人間を護るべき法の埒外の実在であるという事実が——露わになるのが、ここノーマンズランドだ。³⁾

人権なるものが、その言葉とは裏腹に、「ありのままの人間」の権利ではなく、市民や国民である者たちの特権である、という人権をめぐるこの背理は、「実は背理ではなく、国民主権を基礎とする国民国家の誕生の中に書きこまれたもの」⁴⁾である。したがって、国民国家から排除された人々——「人間と市民の同一性、生まれと国籍との同一性を破断する」難民——は、パレスチナだけでなく、世界中に出現しているといえます。日本の「在日朝鮮人」も同様ですが、日本人は、それを「難民」とすらみなさない。「国籍」を与え、従属・屈従させることで「難民問題」を不可視化している。岡さんは、そのことを見逃すことなく、「難民キャンプ」の問題を、中東の砂漠から世界（国民的国家全体）にひろげ、剔出し、問題を投げかけていくのです。

砂漠の辺獄は、国境と国境のはざまにのみ存在するのではない。「人間と市民の同一性、生まれと国籍との同一性を破断する」難民という死者ならざる死者たちが住まう空間はどこであれ、すべて砂漠の辺獄であり、そこにおいて「この世界」を成り立たしめている暗黙の虚構——人間の生まれと国民になるということのあいだにいささかの隔たりもありえないという、国民国家を基礎づける虚構——が白日のもとにさらされている。アガンベンはそのエッセイ『『人権の彼方に』』を、「人間の政治的な生き延びは、空間がこのように穴をあけられて位相幾何学的に変形を受けた地上にあってのみ、自分が難民であるということを市民が認めることができる地上にあってのみ、思考することができる」という一文で締めくくっているが、まさに砂漠の辺獄とは国民的領土に穿たれた、アガンベンの言う、この「位相幾何学的な穴」であり、パレスチナを思考するとは、ノーマンとともにこの砂漠の辺獄から世界を思考するということにほかならない。⁵⁾

パレスチナ難民の問題は、「国民国家を基礎づける虚構」を前提としてあり、パレスチナ難民がかかえる問題の根は広く、深い。ただ、その「虚構」がなぜ成立してくるのか、という点での岡さんの掘り下げた説明はありません。また、ここで僕はこの点を深掘りするつもりはありません。が、その「虚構」が、国民国家を成立させた近代社会の構造的な特徴としてあるのではないか、という問題提起を補記しておきます。

2 ノーマンの闘い

パレスチナ難民を捉える岡真理さんの眼は、たんなる「パレスチナ人の被害」ではなく、「人間の被害」として捉えていこうとする点におかれています。したがって、対立関係は、イスラエル国家とハマスの戦い——これはこれで無視できないものであるにせよ——にあるのではなく、そしてまた国民国家間の対立としてあるのではなく、むしろ国民国家と「ノーマン」の対立のなかに見いだしてい

ます。そこに「人間の闘い」をみてこうとするのです。

「この世」の眼は、メディアの情報操作もあって、国民国家の「人道危機」に向けられています。

「難民」や「難民キャンプ」ということばから、日本社会に生きる者たちの多くがまず連想するのは、戦争や迫害、旱魃による飢餓や自然災害で、故郷を離れることを余儀なくされた難民たちが、国連や国際支援団体の援助を受けて、キャンプでテント暮らしをしている姿なのだろう（…）。1980年代には、アフリカの飢餓難民の姿がさかんに報道されて、世界規模で大々的な救済キャンペーンが打たれたものだ。2010年代の今であれば、ライフジャケットを身につけて、ゴムボートにすし詰めになって地中海を渡る中東難民の姿かもしれない。いずれであれ、死の淵に瀕し、「今」を生き延びるために、国際社会の人道支援を必要としている者たちだ。

パレスチナ難民もまた、70年前はそうだった。ある日、突然、故郷を追われ、彼らは難民になってしまった。「パレスチナ難民」で画像検索してみれば、無数のテントが立ち並ぶ初期のキャンプの写真を観ることができる。とりわけ1948年から49年にかけての冬、パレスチナとその周辺地域は歴史的な大寒波に見舞われた。7月の炎天下に故郷を身一つで追放された難民たちに冬支度などなかったはずだ。寒さとひもじさで命を落とす乳幼児もいただろう。記録的寒波に見舞われたキャンプで、難民たちは寒さに震えながら、配給の列に並んでいたにちがいない。それはたしかに、人道危機だった。⁶⁾

しかし、パレスチナ難民の人たちは、「人道危機」よりも根が深く、イスラエル国家の創設とともに生みだされた権力的・暴力的な「人間の危機」を強いられてきました。イスラエル国家の「占領」や「民族浄化」によって、パレスチナ人は、一方で差別的な「他国籍化」（イスラエル国籍）を余儀なくされ、他方で、強制的に国外（イラク、ヨルダン、レバノンなど）に追放され、「難民」化させられてきたのです。そうした苦難におかれた「難民」について、岡さんは、「ノーマンの闘い」を見いだし、次のような文章を綴っています。

彼らが難民となったのは、故郷にとどまっていれば殺されるからだ。デイル・ヤーシーンのように、タワーイメのように、タントウーラのように〔集団殺戮事件〕。だから、シオニスト〔ユダヤ民族主義者〕の軍隊が自分たちの村に迫っていると知り、彼らは着の身着のまま逃げたのだった、自宅の鍵を握りしめて。だが、それはあくまでも一時的な避難であり、誰もが、状況が落ち着いたら村に戻るつもりだった。実際、畑が心配で、夜の闇に紛れて国境を越え、畑のようすを見に村に帰っていた者もいる。難民暮らしのなかで、金目のものはすべて売り払い、売れるものはもう種籾しかないとなったとき、「でも、母さん、これ売ってしまったら、来年の種蒔きはどうするんだ!」と言って、種籾だけは頑なに売るのを拒んだ家族もいた。早晩、故郷に帰る、それは彼らにとって「夢」ではなく、自明なことだった。テントは、その仮初めの暮らしの象徴だった。

だが、1年たっても2年たっても故郷には帰れず、一方、家族の数だけは増えていく。10年もテント暮らしはできない。当局がテントをバラックに変えようとしたとき、難民たちは当初、抵抗したという。仮設の象徴であるテントがバラックに置き換わるということは、自分たちをパレスチナに帰還させず、この地に定住させるための施策ではないか、と考えて。当局の意図は分からないが、結果的には難民たちが案じたとおりにってしまった。やがてバラックはブロックの家に代わり、ブロックの家は人口が増えるにつれ、キャンプの敷地を隙間なく埋め尽くし、その土地もなくなると、こんどは二階、三階、四階……と、上へ上へと建て増しされていった。

難民たちがテントではなく、子どもが積み木を重ねたようにブロックを積み上げただけの、エレベーターもない高層のアパートに暮らしているのは、70年という歳月がたってなお——国連決議にもかかわらず、世界人権宣言にもかかわらず——故郷に帰ることができないでいる、その結果なのだ。パレスチナの大地に根差して、その大地に汗しながら、谷合いの畑でオリーブを育て、オレンジを育

て、アーモンドを育て、自ら育てた小麦でパンを焼き、生活を紡いでいた彼、彼女らが、今は、そうした一切を剥奪された上、離散を強いられ、市民権もなく、難民として差別され、迫害され、愛する者たちを幾度も殺され、家を破壊され、キャンプを破壊されながら、難民としてキャンプで生き、死んでいく。いつかパレスチナへ、祖国へ帰還できると信じて。パレスチナ人であることを決して手放そうとせず。そんな彼女たちが、キャンプで今なお暮らし、心臓に病を抱えながら毎日、何十段もの階段を上り下りし、ブロックで仕切られた小さな部屋のガスコンロで、国連が配給する油や小麦粉でパンを焼くからと言って、そこに、「ああ、よかった、彼らも悪いことばかりではないのだ、私たちと同じようにアパート暮らしをしているのだ」などと安堵しうるなものも存在しない。

「国民」として国家に書き込まれることと人間であることが同義であるこの世界で、人権という国民の特権を自明なものとして享受している者たち——国民——に見えないのは、この世界でノーマンとされた者たちが人間の尊厳を求めて、いかなる生を生きているのか、いかなる闘いを闘っているのだ。⁷⁾

そうです。「パレスチナ難民」は、たんに「被害者」としてあるものではありません。そうではなく、「この世界でノーマンとされた者たちが人間の尊厳を求めて、いかなる生を生きているのか、いかなる闘いを闘っているか」という実相があるのです。いわば、「人間の尊厳」を求めた闘いが、「祖国への帰還」であり、「ノーマン」から脱出する新たな世界をつくり出す「希望」を秘めているのです。換言すれば、これは「国民国家間」の闘いではなく、「国民国家体制」を超える脱近代的な闘いを意味するものとなっていく。そんな意味をもった闘いだろうと思えます。

3 もう一つの地獄

ところで、「砂漠の辺獄」は、パレスチナに限りません。「もう一つの地獄」があり、それがパレスチナ難民の「問題」を普遍化しています。繰り返すようですが、ガザの「地獄」は、次のような事態のなかにありました。

ガザの200万のパレスチナ人、200万のノーマンたち。人間の諸権利のいっさいと切り離された者たち。ガザのパレスチナ人だけではない。イスラエル占領下の西岸のパレスチナ人も、「ユダヤ国家」イスラエルにおけるユダヤ人ならざるパレスチナ人も、レバノンその他の難民キャンプに暮らすパレスチナ人も、アガンペンの言うこの世界の「暗黙の虚構」、すなわち「人間であること」と「主権概念と強く結びついた国民」であることのあいだにいささかの隔たりもないという虚構の外部で、人間の生まれと市民の同一性を破断しながら生きる者たちはみな、そうだ。彼らがそもそも人間的諸権利の一切から切り離された者であってみれば、この70年間、異邦の難民キャンプ、あるいは占領下という、彼らが留めおかれているそれぞれの《ガザ》、それぞれのノーマンズランドで彼らが被る一切の不条理——イラン・パペが「漸進的ジェノサイド」と名づけ、サリ・ハナフィが「スペイシオサイト（空間の扼殺）」と呼ぶ暴力——にも納得がいく。人間的諸権利から切り離された人間ならざるものとされるかぎり、彼らは法外な暴力にさらされ続ける。ナクバが70年前に生じ完了した出来事ではなく、70年間、現在進行形で今日までずっと継続する事態であるのもそのためだ。なかでも、70年以上がたっても故郷に帰還できない文字どおりの難民が人口の7割を占め、さらに50年以上にわたり占領下に置かれ、そして2007年に始まる完全封鎖のもと、200万の住民が監禁され、生命維持に必要な最低限のカロリーすらも供給されず、ドローンによって絶え間なく監視され、ミサイルが日常的に撃ち込まれ、数年おきに大規模な破壊と殺戮が繰り返されるガザ地区とは、今や「難民キャンプ」というよりも、むしろ「強制収容所」と呼んだほうが似つかねしい。今日を生き延びることが、明日、あるいは数年後に空爆で殺されるためでしかないような、そんな生活。ガザ、それは、アガンペンの言う、諸国家からなる空間に穿たれた穴、位相幾何学的な変形を受けた土地、生きながらの死

者たちが住まう砂漠の辺獄である。⁸⁾

しかし、「砂漠の辺獄」の存続を可能にしたのは、「虚構の外部」にあったからであり、「『人間であること』と『主権概念と強く結びついた国民』であることのあいだにいささかの隔たりもないという虚構」（国民国家体制）そのものが、積極的ではあれ消極的ではあれ、それを支えてきたからでしょう。イスラエルとパレスチナの国家関係——パレスチナ自治政府も実質上の国家であり、ファタハもハマスも、その代行者に成り下がっている——ばかりでなく、アメリカ・西欧を中心とした国民国家体制が、イスラエルを支持してきたからです。また、アラブ諸国家も、イスラエルに対抗しながらも、国家的利害を慮った中途半端なものでした。こうした「支持・容認」そのものが、ヨハン・ガルトゥング（ノルウェーの平和学者）のいう「構造的暴力」として作用していたのです。岡真理さんも、この点を取り上げ、次のように受け止めています。

ヨハン・ガルトゥングは、暴力を、戦争など物理的暴力が直接行使される「直接的暴力」、貧困や差別など社会の構造から間接的に生み出される「構造的暴力」、そして直接的暴力や構造的暴力を正当化したり維持したりする態度や思想などの「文化的暴力」の三つに分類して平和を再定義し、戦争という直接的暴力がないだけでは消極的平和に過ぎない、真の平和（積極的平和）とは直接的暴力に加え、構造的暴力がない状態のことだとした。

占領と同じく封鎖は、ガルトゥングの言う構造的暴力である。物理的暴力の直接的行使である戦争は、人間の殺傷、建造物の破壊を大々的に伴うがゆえに、たった一枚の写真でも、その致命的な破壊性を私たちは容易に見て取ることができる。だが、構造的暴力である封鎖は違う。外形的な物理的破壊を伴わないので、封鎖がガザの人々の生——すなわち生活、命、人生——をいかに致命的に蝕み破壊しているかということは可視化されない。封鎖とは不可視の暴力なのだ。そこにはただ、真綿でじわじわと首を絞めるような、人間と社会を内側から蝕む封鎖下の生という「日常」があるだけだ。戦争のようなスペクタクルな事件性もない。だから報道もされない（これは、ガルトゥングの言う文化的暴力だ）。⁹⁾

このように「不可視の暴力」としての「封鎖」は、「構造的暴力」としてあり、また「文化的暴力」がそれを補完しているといえます。この暴力装置こそ、アメリカ・西欧を中心とした近代的な国民国家体制にほかなりません。なかんずく「文化的暴力」（政治、メディア、情報など）は、パレスチナの真実をその体制内的な「事件」（「テロリスト問題」）に変形していく役割を果たしながら、国際的にもガザの人々を苦しめているのです。したがって、岡さんが、この「構造的暴力」と関わって、「もう一つの地獄」を指摘するのは、重要な指摘であり、日本人の私たちにも、突き刺さってくる問題性があります。

1987年、20年にわたり占領の軛に繋がれていた人々が、その抑圧に抗して、自由を、そして尊厳ある生を求めて立ち上り、死を恐れず占領軍に対峙した（第一次インティファダ）。いかなる圧政も人間から外形的な自由は奪えても、自由を求める自由を奪い去ることはできない。自由と尊厳を求める人間の闘いにおける世界的な前衛だったそのガザの、30年後の姿が「地獄」だった。だが、もちろん真の地獄とは、ガザをそのような地獄にしながら、それを知らずにつつがなく暮らしている者たちが住まう「この世界」のことにほかならない。¹⁰⁾

「この世」には、「無関心」という暴力が蔓延しており、「真の地獄」があるのです。マンスール・アル＝ハッラージュ（イスラム神秘主義者）の言葉——地獄とは人が苦しんでいる場所のことではない。人々の苦しみを誰も見ようとしない場所のことだ——を掲げながら、岡さんは、ガザの殺戮と破壊をくり返させているのは、「私たちの無関心」だと断罪するのです。

ガザの殺戮と破壊は、世界注視のなかで起きている。最新兵器の実戦デモンストレーションでもあるのだから当然だ。日本のメディアでも報道された。私たちは決して知らないわけではない。無知がホロコーストというジェノサイドを可能にしたのだとしたら、繰り返されるガザの虐殺を可能にしているのは、私たちの無関心だとも言える。茶の間に流れるガザのニュースは、一瞬、心を波立たせはしても、多くの者にとってそれ以上のものではないのだ。¹¹⁾

4 希望としての連帯

だが、それにしても、ガザに希望はあるのだろうか。

岡真理さんは、2014年10月にガザから来日し、京都で講演を行った「パレスチナ人権センターの代表、弁護士のアジ・スラーニさん」の言葉から、希望について語っています。

あのことば[「一切れのパンすら他者と分かち合う者たち」]は単に、こんな悲惨な目に遭っても、それでもパンを分け合っている、人間性を失わないガザの人々の素晴らしさを讃えたのではない。それは、彼が身をおいて生きるガザという地獄の絶望の深さと、そこでなお、その状況を変えるために彼自身が働き続けていくために彼が信じ続けようとする希望なのだ。地獄の絶望的な闇のなかで、人々は、絶望に蝕まれず、明日を生きるための魂の糧、希望を必要としている。真の「希望」というものは地獄の中でしかみいだすことはできない。¹²⁾

希望がある場所は、ハマスではなく、またパレスチナ自治政府でもなく、さらに「この世」の国民国家体制でもない。それは、「その状況[地獄]を変えるために彼自身が働き続けていくために彼が信じ続けようとする希望」としてあり、岡さんは、「状況」を変える人々の「連帯」——パレスチナ市民の新しい活動の動き——のなかにその「場」を求めていくのです。

実際、パレスチナ問題と関わって、少なくない市民的な行動がありました。たとえば、ガザに対するジェノサイド攻撃が続いていた2014年8月22日、ホロコーストの生還者、および生還者と犠牲者の遺族ら三百有余名が名を連ね、「ニューヨーク・タイムズ」紙に意見広告としてイスラエル非難の声明を発表し、世界的反響を呼んだことがあります。また、「すべての市民のための国家」をめざした近年の新たな市民運動の一つである、BDS運動(Boycott, Divestment, and Sanctions/イスラエルに対するボイコット、投資引き揚げ、経済制裁の運動)などが、目を引きまします。が、とりわけ注目したい市民運動は、何といても「帰還の大道行」のデモンストレーションです。岡さんは、2018年5月のこの運動について、次のように語られています。

ガザの市民社会のイニシアティブで始まったこの非暴力直接行動、「帰還」のマーチには毎日、数千人ものパレスチナ人が参加し、週末ともなると、その数は数万人を数えた。ガザのパレスチナ人がまさに怒濤となって境界地域に押し寄せたのだった。国際社会が認めるパレスチナ人の正当な権利である難民の帰還と、国際法を踏みにじって継続する違法な封鎖の解除を求めて。[…]

デモの舞台となった境界地帯では、故郷の村々の名がつけられた、70年前の難民キャンプのテントも再現され、その傍らで、難民一世の老齢の女性たちが——ナクバで故郷を追われたときはまだ幼い少女だった女性たちだ——パレスチナの伝統衣装に身を包み、村での生活そのままに竈でパンを焼き、伝統料理をマーチの参加者にふるまい、パレスチナの歌を歌い、孫たちに故郷の村での生活の記憶を語り聞かせた。故郷への思い、帰還への思いが、12年続く封鎖でばらばらになった人々をまた、ひとつに結びつけた。¹³⁾

国家暴力による殺戮や破壊がそれぞれの自由を保障させるのではない。市民の自由（「祖国への帰

還」)こそが人々の連帯を生みだし、また市民の連帯こそが自由の実現につながるのです。岡さんは、本書の末尾で、ガザのアーティストであったムハンマド・アブーサルが制作した「ガザの地下鉄」と題する想像上の地下鉄路線図を思い起こしながら、次のように結んでいきます。

「ガザの地下鉄」は、私たちがまだ見ぬ、美しいパレスチナの明日、美しい世界の明日を想像させてくれる。「絶望の山」から「希望の石」を切り出す鑿〔のみ〕だ。この世界がいまだ目にしたことのない、私たちのもっとも美しい子どもたち、私たちのもっとも美しい日々を想像すること。すべては想像することから始まる。「人間に想像できることはすべて、実現することができる」(ジュール・ヴェルヌ)。今、ガザの砂漠の辺獄の際で、生を賭してワタン〔祖国〕への帰還を求めるガザのパレスチナ人の魂の叫びを聴き取るとは、私たちがこの世界を私たち自身のいかなるワタンとして想像し、それを全霊で希求するのか、ということと限りなく同義である。¹⁴⁾

なんと魂を震えさせるエンディングでしょう。まさに然り。自由は、「地獄」を超える想像の未来にあり、です。

(注)

- 1) 岡真理『ガザに地下鉄が走る日』みすず書房、2018年、250~251頁。
- 2) 同上、281頁。
- 3) 同上、17頁。
- 4) 同上、22頁。
- 5) 同上、23~24頁。
- 6) 同上、148頁。
- 7) 同上、145~150頁。
- 8) 同上、280~281頁。
- 9) 同上、267~68頁。
- 10) 同上、274頁。
- 11) 同上、248頁。
- 12) 同上、274~5頁。
- 13) 同上、283頁。
- 14) 同上、297頁。

(なかむら きょういち)

【コラム】2023 年 10 月（神無月）、 オムニバス三題

重本冬水

今月号の投稿は、本「通信」8月号、9月号に掲載されています戦争と原発に関連するテーマでの原稿を予定していました。そうした中、10月19日に、所員の平田厚志さんから「『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の『大転換』—『個の責任』の自覚から見てきた水俣病事件の本質—」（『行信学報』第36号、2023年10月）の論稿抜刷が届きました。早速、読ませていただきました。考えさせられます。そこには、「欲望の価値構造」の「大転換」、「一人の『個』に帰る」についてなどの考察がなされています。ここから「市民の科学」の方法を考えてみたいと心が動きました。他の執筆途中の原稿はいったん中断です。

（1）

この「大転換」の内容を、小野文生「＜非在のエティカ＞の生成する場所—水俣病の記憶誌のために」の論文をふまえて、平田さんは次のように述べています。

「何から何への『転換』があったのか」というと、①『制度』のなかに解消される責任から、顔を持つ個人が担う責任への転換、②一方的な責任の構図にもとづく『加害責任』を問う立場から、共に責任を構想的に引き受ける『課題責任』への転換、③裁判による法的制度的『認定』と経済的『補償』に縮減された水俣病問題から、すべての人々が直接・間接に関与する命の連なりとしての水俣病問題への転換、が緒方自身に強く意識され、認識されることになった。まさにこの三つの『大転換』が緒方の内面で起ったのである。とりわけ、三つ目の『大転換』が重要であろう」（同上抜刷10～11ページ、以下ページ数のみ記載）。

私は、三つ目の転換と共に二つ目の「共に責任を構想的に引き受ける」への転換、その「構想」の言葉に引きつけられました。

平田さんは、この転換を「『一人という私に立ち返る』なかで、『チッソはもう一人の自分ではなかったのか』という、大どんでん返しの逆転心境が緒方の心の中に起こったのである」

（11）と述べています。その「心の中」とは、「緒方にとっての『水俣病問題』は、制度的『認定』『補償』としての問題から精神的・宗教的『いのちの連なり』の問題へ、いいかえればこれまでの人為的・世俗的価値観に基軸が置かれてきた『水俣病問題』は、倫理的・宗教的価値観に基軸を置く『水俣病問題』へと関心が深まっていくのは当然のことで、緒方の大どんでん返しは“水俣病事件”の本質・核心を問う問題へ迫ろうとする質的大転換・大飛躍であったということではなかろうか」（11）と述べられます。

緒方自身が述べる「一人の『個』に帰りたい」（14）は「連なる命の世界の中に、自分がひとり連なって生かされているという実感」（14）として捉えられています。それは「善悪の二項対立的価値観、彼の言葉でいえば、被害者側が『善』、加害者側を『悪』と決め付けた『物差し』にどれほどの妥当性があったのか、ということへの懐疑であった」（8～9）のです。それは緒方のチッソに対するより根源的な（よりラジカルな）批判につながったのではないかと思います。また「市民の科学」の市民は「一人の『個』」であると共に「連なる命の世界の中に」生かされている存在と思います。

前述の「構想」という用語が“ものごとの全体としての内容を実現するための方法について考えをめぐらし組み立てること”であるとする、緒方は「水俣病問題」を全体としてどのように考えをめぐらし組み立てたのであろうかを知りたいと思います。

では、「水俣病」とはいったい何であるか。平田さんは、「水俣病は、メチル水銀化合物（有機水銀）が生き物の体内に蓄積されて神経機能を麻痺・破壊されたことによって引き起こされたものである」（26）とし、また「国策企業のチッソ水俣工場（熊本県水俣市）で生産された製品の製造過程

で排出された有毒の有機水銀を含む排水を、何の安全処理もせずに、水俣湾に垂れ流したことによって湾内が汚染されたことによる」(26)、さらに「近代産業文明の負の姿が露呈したもの」(26)とも述べられています。そしてこの「負の姿」を平田さんは次のように述べます。

「自分が闘ってきた相手とは、チッソであれ、県・国であれ、法律や制度といった統治システムで厳重に防禦された巨大な『システム社会』の組織そのものであって、いっこうに闘争相手となる責任主体の顔が見えないのである」(9)。

「責任主体」の顔が見えないという「負の姿」、「被害者側も、『システム社会』にがんじがらめに絡めとられてしまっており、思えば自分もまた『欲望の価値構造の中で同じことをしていたのではないか』(『チッソは私であった』八頁)ということに気づかされ、・・・＜中略；重本＞・・・すべてはカネに換算され、カネの価値に置き換えられ、国や企業の土俵でものごとが処理されていく」(9)という現実、一市民の緒方は「驚愕し、戦慄し、奈落の底に突き落とされる」(9)のです。

他方、この「システム社会」の「欲望の価値構造」の中で、「チッソを潰せば患者への補償も出来なくなるし、地域社会も崩壊してしまうというのが、加害企業への公的資金支援の論理であるが、それは少数の犠牲者には目をつぶってでも、多数者の生活の安定を求めることを優先させようとする意図の上に立つ論理であり、本来『共生社会の実現』を望む多くの人々の願いとは、全くもって相容れない、悪しき資本主義の論理と言うほかない」(27)と平田さんは喝破されています。

他にも、本稿は、「自然界の法」、「倫理的・宗教的価値観」、「浄土真宗の教義」、「弥陀の本願」、「本願の会」、「真俗二諦」論、「響存哲学」などにも言及されています。私としては、平田先生に市民科学京都研究所の共同研究会あるいは市民科学講座などで是非ご報告をしていただき議論させていただければと思っています。緒方の壮大な「構想」を「市民の科学」として共有したいと思います。

(2)

「水俣病」、私にとっては「有機水銀中毒症」あるいは「チッソ水俣による有機水銀海洋放出による中毒症」です。この水俣関連の書から古書店を開かれたカライモブックスという名の本屋さんがあります。今年の4月30日まで上京区で古書店を開いていました。私が2018年3月に退職した後、何度か書籍を段ボール箱に入れて寄贈しました。本の所蔵場所に困っていたこともあり車で多数の段ボール箱を運びました。奥田順平さんと奥田直美さんご夫妻が営まれていました。私はこの古書店でウィリアム・モリス、高木仁三郎、日韓関係問題などの本を購入しました。残念ながら水俣に引っ越されました。引っ越し先は石牟礼道子さんが住まっていた家です。現在、古書店兼住居として準備中で、来月、11月に古書店カライモブックスをオープンされるようです。盛業を願っています。水俣に行く機会があれば訪ねたいと思います。以下、カライモブックスからのニュースがあります。ご協力・ご支援いただければと思い転載いたします。

＜古本カンパのお願い＞(KARAIMO BOOKS NEWS＜2023/09/26＞より)

こんにちは。水俣でこの家で三人、健やかに暮らしています。生活するにあたって、開店するにあたって、十月から自分たちではやりきれない工事を大工さん(弘さんの教え子)と左官屋さんに頼みます。八年前に弘さんが亡くなられてから空き家になっていて、いろいろ弱っていますが、ほんとうによい家です。よい家。わたしたちが、死んでからも建っていてほしい家。ここに道子さんと弘さんはいた。このことは永遠(永遠というのは、この土地への暴力となりうると考えます)とは言いませんが、しばらくは形として残っていてほしいと切望しています。

という九月の終わりにカンパのお願いです。古本カンパのお願いです。工事代はなんとか払えるのですが、残るお金は雀の涙。雀、もじょか。この庭にも時おり来てくれる。わたしたちは古本屋です。新本も売っていますが古本屋です。古本を売って生活を立てています。本がほしいです。石牟礼道子、水俣、フェミニズム、アイヌ、沖縄、韓国、炭鉱、原爆、原

発、公害、市民運動、食、障害、詩、海外文学、絵本、哲学、社会学、芸術など、わたしたちの好きそうな本で、もうそばにいらなくてもよいと思った本があれば送ってほしいです。そのそばにいた本を売ってわたしたちは水俣でこの家で暮らしを立てていきます。立てていきます。お金は払えませんが大切にします。どうぞよろしくお願いいたします。工事が無事終わって、11月に開店予定です。ご来店お待ちしております。

※古本カンパのご質問等あれば、ご気軽にご連絡ください。メールか電話でお願いします。

古本カンパの送料は着払いと言いたいのですが、送料発払いでお願いします。図々しくてごめんなさい。

古本カンパ送り先住所（カライモブックス）

〒867-0006 水俣市白浜町8-36

電話 0966-84-9277

メール karaimobooks@gmail.com

(3)

10月20日、李洙任さん（現在、龍谷大学名誉教授）が控訴しました裁判（被告は龍谷大学法人理事長、経営学部長二人と教務主任）の控訴審が大阪高裁（地下鉄堺筋線・南森町下車徒歩10分、中之島公会堂の北側）であり、久しぶりに阪急電車に乗りました。車内の広告パネルに、大阪府からのメッセージが掲載されていました。「海の中が、ごみだらけ。そんな未来がいいですか？」（SD GOALS）のメッセージです。その下に、「大阪府は海洋プラスチックごみゼロをめざしています！」のメッセージもありました。

すぐに思いました。「海の中が、**放射能ごみ**だらけ。そんな未来がいいですか？」、「大阪府は**放射能ごみ**ゼロをめざしています！」の広告をしてほしいと。「ごみ」とは人間が生み出したものです。原爆、原発は人間が生み出したもの、原発の放射性廃棄物、この危険極まりない「放射能ごみ」を海洋放出してもよいのですか、「そんな未来がいいですか？」と大阪府と政府に聞いてみたいと思います。

海へのごみ廃棄、プラスチックごみ廃棄に安全基準はあるのでしょうか。ないのです。大阪府は海洋プラスチックごみ**ゼロ**をめざしています。何故、放射能ごみには「安全基準」があるのでしょうか。「国家の科学」と「資本の科学」の本質が見えてきます。ことさら「安全基準」と「科学的根拠」の言葉を繰り返し強調し続けるのです。マスコミ報道も同じです。ナチス・ドイツの「嘘も百回言えば真実となる」が浮かんできます。「危険」を「安全」にすり替えるのです。

「福島原発放射能廃棄物海洋放出事件」は、「システム社会」の「欲望の価値構造」の中で「すべてはカネに換算され、カネの価値に置き換えられ、国や企業の土俵でものごとが処理されていく」ことが、「水俣病事件」以上により狡猾かつシステムの的に進んでいます。ここからも緒方の壮大な「構想」を「市民の科学」として共有したいと思います。

裁判の方は傍聴席30席がいっぱいになり入れない支援者もありました。支援事務局としては「立ち見」でもいいから入れてもらいたいと思いましたがダメとのことでした（「立ち見」でできる空間は十分あるのですが）。入りきれない傍聴者の数はこの裁判の重要性（大学ガバナンスのあり方への異議申し立て）を高裁裁判官にもアピールすることになったのではと思います。当日の裁判は、控訴人弁護団および李先生からの口述での控訴陳述が認められ、冒頭に行われました。しかし、控訴人側からの証人尋問として私と現職教員が裁判所に申請されましたが認められず、この日に結審となりました。判決は12月13日と告げられました。裁判終了後、弁護団（弁護士4名）からの説明を含めた賑やかで和やかな支援集会を開きました。逆転勝訴を願っています。

（しげもと とうすい）

【コラム】 レストラン「人民議会」

照井 日出喜

「人民議会 (Volkskammer)」は、かつて東ドイツに存在した国会に当たるもので、SED (ドイツ社会主義統一党) が主導権を握っていたとはいえ、複数の政党、労働組合、青年組織、女性組織、文化同盟の代表者たち 500 名によって構成される議会であった。東ドイツの消滅 (法的には 1990 年 10 月 3 日であるが、実質的には、権力が全面的に無力化したという意味で、1989 年 11 月 9 日の「ベルリンの壁崩壊」をもって、冷戦下の分断国家の一方は歴史から消える) から 33 年を経た現在、人民議会の建物であった共和国宮殿は取り壊されて影も形もないにも関わらず、その名称を冠したレストランがベルリンにあることを、知人たちが突き止めてくれた。

近年のベルリンは、「ドイツ・レストラン」が緩慢ながら「イタリア・レストラン」に駆逐されつつあり、伝統的なドイツ料理のレストランが減っているのではないかと、というのが、わたしの印象であった。要は、年に一度ぐらい、まともなアイスバイン (Eisbein、豚の太い脛の部分^{くた}を長く煮込んだもの) を食べてみるのも一興、ということであり、日本に点在するドイツ料理店なるものにも、おそらくこの種のメニューはあるのであろうが、探すのも面倒な上に、所詮、日本なのだから高価な割に中身はまがい物だろう、という先入観のゆえに、ベルリンのドイツ・レストランである種のノスタルジアに浸ろう、というのがわたしの魂胆であった。

レストラン「人民議会」[Original Ostdeutsche Küche - auricks Webseite! \(volkskammer.de\)](http://www.volkskammer.de)は、東ドイツ時代には東ベルリンの中心駅であったオストバーンホーフ (東駅) から歩いて 2 分ぐらいの所にあり、わたしたちは 12 時に予約していたのだが、店はなかなかの盛況であった。

店内には、エーリッヒ・ホーネッカー (ドイツ社会主義統一党書記長・国家評議会議長) やヴィルヘルム・ピーク (ドイツ民主共和国大統領) の大きな写真が掛けられているのだが、東ドイツ時代に、レストランに彼らの大判の写真があったという記憶はない。そうした無粋きわまる写真は、もとより食欲にはネガティブに作用するのが落ちなのであるから、これは、「いまは亡き国」への追憶を一応の売りとする店の「独自の」小道具なのであろう。東ドイツ時代の物とされる、かつては子どもたちが嬉々として遊んだであろう、さまざまな人形や飾り物なども、いたる所に置かれており、店内は、たしかに「疑似東ドイツ風」の雰囲気を持つものではあった (前述の HP を参照)。

メニューは、「オリジナル・東ドイツ風」を標榜するだけあって、当時のものと変わりはないように思われた [Ostdeutsche Speisen - auricks Webseite! \(volkskammer.de\)](http://www.volkskammer.de)。ソリヤンカ (ウクライナ地方が発祥の地とされる、魚や肉と塩漬けのキュウリなどを入れたスープで、レモンの薄切りやサワークリームが載っている) や、べつに東ドイツの特別料理ではないが、ジャガイモとソーセージと煎り玉子の「農夫の朝食」(Bauernfrühstück) は、たしかに当時の定番であった。

わたしが注文した、コロナ禍のゆえに何年にもわたって恋焦^{くた}がれ続けた件のアイスバインは 16 ユーロ 20 (円が価値のない現在では、約 2,500 円) で、つまりは、メニューは「オリジナル・東ドイツ風」でありながらも、値段は当然のこととして、およそそれとは逆の「オリジナル・再統一ドイツ風」のものであった (おそらく、東ドイツ当時は 5 分の 1 ほど、6 東マルクで 500~600 円ぐらいだったのではないかと思います)。

もとより、このレストランで消えた国を懐かしむ、などという人は皆無であろう。「東ドイツ風メニュー」が、ある種のささやかな「エスニック料理」として、一定の人びとに受け入れられているということなのかも知れない (じっさいには、単に伝統的なドイツ料理でしかないのであるが)。

支払いとなり、テーブルにやって来たウェイトレスさんに、知人が冗談に、「こちらでは、(東マルクではなく) ユーロでも支払いができるのでしょうか?」と尋ねると、彼女は、「ええ、ユーロでお支払いいただけますよ!」と、にこやかに、半分、笑いをかみ殺す風情で答えた。

「人民議会」のアイスバインは、次回の旅行でも、わたしには依然として憧れの対象である。
(てるい ひでき)

NPO活動の限界

塩小路橋宅三

NPO法人や社会福祉協議会、保護司会などの地域活動を続けてきた。周りから理事長や会長就任を要請されたが健康上の不安から断ると、副理事長や副会長を依頼されて会長の後継者ではないことを前提に引き受けた。幸か不幸か健康上の不安は的中したので、辞退の理由は嘘ではないことが推薦者に認められた。そこで気が付いたのであるが、組織の役員のなり手がないうちどころか、ボランティアとしての構成員へのなり手もないことであつた。周りを見渡しても高齢者ばかりが目につき、このまま年下の者の参加がなければ何年後かには消滅の危機を迎えることは確実である。よく考えてみると、ボランティアする人とボランティアされる人との溝があるように思える。これは世間で言うようなパターンリズムという単純な表現では済まされない問題である。今でも困ったことが生じた場合に頼りになるのは血族で、本当は公助と言われる公的扶助のような取り組みが必要なのであるが、共助の一種である宗教的連帯のほうに頼りになるようである。では、日本ではNPOのような自主的なボランティア活動が低調なのであろうか。行政の助成金に頼り切っているNPOなどは本当のNPOではない。行政のすべきことを助成金によって肩代わりしているだけであるが、行政関係者からすると善玉NPOとなるのである。岸和田のだんじり祭りのように地域の祭礼には住民税を滞納してまで多額の寄付が集まると言われているのに、NPOのファンドレイジングには苦戦するのはなぜだろうか。京都の時代祭のようにNPOである町内会からいわば強制徴収することも、善意だけで事業費が捻出できないことを示唆している。

ときおり研究者の持ち込む高尚な論理に翻弄されることもある。研究者と称する専門家は研究に興味を抱いており、当該のボランティア組織は研究対象である。寄付や学生による活動支援をしてくれる研究者も存在するが、研究期間が過ぎれば縁の切れ目となる場合がほとんどである。それならば、票目当ての政治家のほうが余程信用できる存在である。政治家を辞めない限りにおいて付き合ってくれるからである。逆に言えば、政治抜きでのボランティア活動などは存在しないと考えている。本来、ボランティア組織は一党一派の主張に属さない限りにおいて多くの人が参加可能である。これも逆のその逆を言えば、特定の政治団体や宗教団体のほうが強固なつながりである。つまり、不特定の人を対象とするボランティア組織とは入会も脱会も自由な頼りない団体なのである。と考えつつ、副理事長を務めるNPO法人洛西福祉ネットワークも10周年を迎えた。理事が頑張っている姿を見せれば支持が得られるのであるが、それがマイナスの方向では行政にとっては善玉NPOであっても社会にとっては悪玉NPOである。社会にとってプラスか、それともマイナスかの見極めが難しく、NPO法人では結果的に理事長の恣意性に委ねられることとなる。反対を表明すれば、「それならば理事長を引き受けてくれ」と言われる可能性が高いので、提案された場合にはしばしの沈黙が生じる。理事長が恣意的に決めた考え方は、必ずと言っていいほど後に問題を残すことになる。理事長が辞めると言ったら継続性もなくなるのがNPOで、ほとんどの理事はマイナスの方向に進んでいるのを気が付きながら沈黙を守るのである。

テーマ別のNPO組織ならば特定の地域に偏らないのが本筋であるが、特定の地域の課題の解決などを考えることから地域特化したNPOが一般的である。地縁的な町内会や自治会は、自由で自主的な自治によって特定地域の課題解決のために存在するNPOと言ってもよいわけ

である。そこで学校教育であるが、世界を股にかけた国際的なグローバル人材よりも地味な地域活動に時間を割いてくれるローカル人材育成のための教育が必要と思える。大学などは入口の偏差値と出口の就職率で勝負しているが、教育の質などは偏差値や就職率に抱き込まれ、レジャーのようなアクティブラーニングの存在が現状である。そこで地域の核である小学校であるが、国際的が合言葉となり地域を知る教育はないがしろにされている。どんな話が飛び出すかもしれない地域のNPOと小学生の忌憚のないところでの対話などは、管理者としての校長などは避けたいところが本音であろう。それゆえに安心できる代表者が小学校に出向くこととなるのである。それは本当の地域を知ることにはつながらずに行政寄りの色眼鏡を押し付けることにもなりかねない。このような現状を顧みて確実に言えることは、小学校での英語教育よりも地域教育のほうが大事と考えられる。

久々に阪神タイガースがセントラルリーグ優勝したが、そんな話題が席卷していて世間は騒々しい。経済の波及効果で世の中が良くなるような集団催眠にかかっている。騒々しい「にぎわい」は球場の中で十分なのではないかと思える。もちろんNPOの中にも経済の波及効果を頼りにしたお祭り騒ぎの「にぎわい」に特化した活動をする団体もあるが、住宅地の地縁的NPOにおいては「静かなまち」が守られることが本音ではないか考える。行政関係者はイベントによる「にぎわい」によって存在感を示そうとするが、重要なところはそのイベントから何が生まれるかである。行政はイベント参加を呼び掛けるが、実際は「にぎわい」演出のための動員と言っても言い過ぎではない。草の根的なNPOが行政の動員戦術についていけば、行政にとっての善玉NPOとして助成金などは受けやすくなるだろう。それが行政関係者の実績作りとパターンリズムで行われていたとすれば問題である。カネの切れ目が縁の切れ目になるからである。市民にとっての善玉NPOはハード面よりもソフト面を重視する。「にぎわい」を創出するイベントよりも人と人との関係性なのである。来年には京都市長選が予定されており、現職は不出馬とのことである。この四年間は全国的にはコロナ禍で持ち切りであった。京都ではコロナ禍の回復とともに再び観光公害が話題に上がっている。過去の京都市長選では観光業者との利害関係もあって、この市民生活に影響する重大なことが避けられてきた。草の根NPOとしても行政の主導する「にぎわい」とは何かを考えてみる必要がある。阪神タイガースが日本一になってもパレードなどに同調せずに、胸の奥で喜びをかみしめているのが本当のファンであると思う。身近な仲間とだけ喜びの宴を張るのもNPOならではの人と人とのつながりである。いずれにしてもNPOの「個人商店化」は活動の限界にもつながると考えられる。

(しおこうじばし たくぞう)

新書散策の旅（シリーズ第 12 回）

…大塚敦子『動物がくれる力 教育、福祉、そして人生』（岩波新書、2023 年）から学ぶ …

宮崎 昭

ジェニーが家に戻って以来、オズロとトミーはそばを離れようとしないう。ベッドに横たわる彼女の隣にはオズロが寝そべり、トミーは枕元に座る。トミーは外を歩るのが好きで、ジェニーが元気だったころは家の中にいることはめったになかった。だが彼女の病状が悪化してからはしきりにそばにいたり、子猫のころのようにジェニーの膝や胸の上に乗って甘えるようになった。

ジェニーがどんなにいらいらして周囲にあたっているときでも、オズロとトミーは動じなかった。彼女が癇癪を爆発させると、私などはなんと言葉をかけていいかわからず、その場にいたたまれなくなってしまうのだが、犬と猫はひたすらジェニーに寄り添い続け、彼女の心を慰めた。

ただ黙ってそばに続けること、それがどんなに大切なことかわかっている、人間にはなかなかできない。そんなむずかしい仕事を、言葉を持たない動物たちはごく自然にやってのける。動物にしかできない愛し方もあるのだと思った（大塚[1997]70 頁）。

＊オズロはラブラドル・レトリバー、トミーはジェニーに拾われた捨て猫。インコのシュガーも同居していました。ジェニーは、この犬、猫、インコに囲まれて 29 歳の短い青春を終えました。

ジェニーを見守ってきた大塚さんは、「私はその後、30 年にわたり、人と動物のポジティブなかかわりを見るために旅することになります」（大塚[2023] iii 頁）と述べて、「動物がくれる力」をととてもリアルに、そして感動的に、その「旅の跡」を紹介してくれています。

その旅先には、「受刑者たちが保護犬を介助犬に育てるアメリカの女子刑務所を皮切りに、困難を抱える子どもたちの施設、介助犬や盲導犬と暮らす人々、日本の刑務所や少年院、小児病棟や高齢者施設など」（同上）があり、およそ「旅先」というには似つかわしくないところばかりです。しかし、大塚さんはその「旅先」で異次元とでもいべき世界を発見するのです。

§

テレビ番組で、「セラピードッグ」（老人ホームや病院などへ連れて行き、介在させることで落ち込んだ人の心に明るい光を与える役割を果たす犬）と「ファシリティドッグ」（施設や病院に常駐し病気を抱える人への精神面を支える仕事をする犬）の活躍を観て、彼／彼女ら「わんちゃん」の魔法のような「力」に魅了されたのが、ほんのついこの間のことです。この「わんちゃん」に、えもいわれぬ超能力のような力があることに、何より驚きました。

先日の新聞コラムで、「わんちゃん」についての言及がたまたまありました。猫は「ねこちゃん」と呼ぶのに、犬は「いぬちゃん」と呼ばないのはなぜか、という身近に控える素朴な疑問についてです。「国語辞典編纂者」によるこのコラムでは、「犬」という言葉が、じつは一

面で悪いイメージを持つからだというのです。「権力の犬」（手先）、「犬侍」（腰抜け侍）、「犬死に」（無駄死に）など、確かによいイメージではありません。その悪いイメージを引きずっては、「セラピー」と「ファシリティ」のいずれの“犬”たちも気の毒です。やはり、「わんちゃん」と呼ぶことで安心します（が、しかし、「わんちゃん」では“愛玩”のイメージが強いことに注意しなければならないでしょう）。

古い話で恐縮ですが、ディズニー映画『わんわん物語』（1955年）、アメリカのテレビドラマ『名犬ラッシー』（1954年～）など、私の記憶にあるのは「犬」ではなく、「わんちゃん」です。

ところが、大塚[2023]に登場する健気な「わんちゃん」たちは、単に「犬」と呼ばれており、なんとも素っ気ない感じがします。いやいや、“イヌ”ではなく“ケン”であって、正確には「盲導犬」「介助犬」「学校犬」「セラピー犬」「読書サポート犬」「付添犬」「補助犬」「ホームヘルプ犬」「聴導犬」などなど、ただの「犬」ではなく、大事な役割が冠に示されていますし、重要なのは単に「わんちゃん」ではなく、個体名に愛称がつけられて、「フラン」、「ハッシュ」、「ブルータス」、「トリトン」、「アンソニー」など多彩な呼び名で愛され、かけがえのない「単独者」として慕われているのです。

§

この書では、犬だけでなく、猫や馬などが実例を以って紹介されており、いわゆる「アニマルセラピー」、正式には「動物介在介入」というのだそうですが（「介入」という表現なんとかありませんか）、その活躍ぶりが示されています。たとえば、介護施設ではこんな「恩恵」があるといえます。

たとえば、入居者が明るくなること。精神が活性化し、周囲とのコミュニケーションが増えること。動物がそばにいて、夜安心してぐっすり眠れるため健康状態が良好になること。ブラッシングが拘縮（こうしゅく）しかけた腕のリハビリになったり、動物とふれあったり声をかけたりすることが認知症の進行を遅らせたりすること。地域の人たちがボランティアとして動物たちのシャンプーやトリミング、散歩のために来てくれるので、地域との交流が進むこと。このように枚挙にいとまがないほど、いろんな効果が生まれているようです（大塚[2023]248－249頁）。

どれもこれも「近代医学」を超えた話のように感じます。では、難病を患っている子どもたちはどうでしょうか。看護師でありハンドラーである大橋真友子さんとファシリティドッグのアイビーの活躍です。

小児総合医療センターは救急救命から小児がん、心臓病、先天性疾患、精神科など子どもの病気全般に高度な医療を提供する病院。大橋さんとアイビーの活動は、医師の指示があり、原則一か月以上入院している子どもが対象です。…中略…アイビーは日常の子どもたちとのふれあいのほか、手術室や治療室に同行したり、骨髄穿刺（せんし）など痛みと恐怖を伴う処置の場で子どもに寄り添って緊張や不安を和らげたり、リハビリのサポートでは子どものやる気を引き出したり、とさまざまな働きをします（220頁）。

俊彦君は横隔膜にできた腫瘍を取り除く手術を、近く受けることになっていました。そのときはアイビーに手術室まで付き添ってほしい、と大橋さんに頼みました。「アイビーがいてくれたら、手術の怖さも吹き飛ぶと思う。不安なときこそ、ア

イビー」

犬は人の気持ちを読み取り、寄り添うことができる動物です。アイビーはきっと自分が頼りにされていることがわかっているのでしょう。その穏やかな目でじっと俊彦君の目を見つめる様子は、まるで「私はここにいます。だから心配しないで」と言っているかのように見えました（222 頁）。

人間だってきもちを読み取る能力はあります。なにより、言語を介しての交流のあることが、動物よりも優位な位置にあると考えられています。でも、どうも言語をもたない動物の方が、秀逸な能力をもっているようです。これは誰でもが気付くことではありません。大塚さんは、ジュニーが愛する夫や、オズロ、そしてトミーやシュガーに囲まれながらも、厳しい闘病生活を耐えしのんできた様子を真摯に、愛情をもって見守ってきたからこそ、鋭い洞察力を身に付け、「動物がくれる力」を見定めることになったのではないかと思うのです。大塚さんの「きもちを読み取る能力」のなせる業です。

§

アメリカの女子刑務所でのスーとブルータスの愛情物語は、メタファーで綴られていて教訓的です。受刑者スーが、保護犬ブルータスを訓練して介助犬に育てる話なのですが、インタビューした大塚さんも感動しています。

「ねえ、どうして私がこれほどブルータスに入れ込んだのかわかる？ ゴミのように扱われるのがどんなことか、私はよく知ってるからよ。ブルータスはまるで刑務所に来たころの私みたいだった。だから、どうしても、人を信じる心を取り戻させてやりたかったのよ」（同上 125 頁）。

スーにとってブルータスはかつての自分でした。私は、「人を信じる心」という言葉に強く引き付けられます。

それはスーがブルータスを信じ、この気持ちに込めて「人を信じる心」がブルータスに蘇るのであって、一種の「異文化コミュニケーション」であり「他者との関係構築」「異質性との相互行為」（鳥飼[2021]51 頁）に他なりません。「人を信じる心」を破壊され、ただ殺し合い、破壊し合うことによってしか「異文化」との“コミュニケーション”を行えない、ロシア＝ウクライナ、イスラエル＝パレスチナ（ハマス）の現状は、胸を掻きむしられるような「相互行為」（相互否定、相互排除）として「心」に突き刺さります。

一方、馬もまた注目の動物です。

馬による動物介在療法や活動の専門家である木下美也子さんの談が紹介されています。

「馬は人間の感情を敏感に察知し、反応します。子どもたちがイライラしたり、怒ったりしていると、それを受けてパッと身を引いてしまう。耳を後ろに向けたり、離れていったり、自分が不快だということを、子どもにもわかるほどはっきり表す。犬は嫌なことをされてもがまんしてしまうけれど、馬は嫌なら嫌と言う動物。そういう馬とのかかわりは、子どもたちに自分と相手の関係について教えるいい機会になるんですよ」（大塚[2023]161 頁）。

我慢しないのですね、犬と違って馬は。それだけに馬との関係構築では、「人間のほうが馬の特性やボディランゲージによるコミュニケーションを理解し、馬に信頼される努力をする必要」（同上）があるといいます。言語をもたない動物たちとのコミュニケーションは、それ相

応の努力が求められるということなのですが、「他者」、ここでは動物たちなのですが、「『他者』の言語と文化を学ぶことにより、個々人が豊かなコミュニケーション能力を培うことで、相互理解が可能になり、究極的には平和が守られる」（鳥飼[2021]79頁）ことになります。

明日、明後日の「平和」の話ではないのですが、これを視野の外においては「平和」の実現は覚束ないはずです。

§

さて、「平和」の話まで広げてきましたが、私流の理解するところでは、「動物がくれる力」というのは、病院で難病に直面する人びとや戦争に身を投じる人たちの、「こころ」の問題にあたかな手を差し伸べてくれるという意味で、「近代科学の合理主義」へのアンチテーゼではないか、と考えるのです。というのも、私自身の経験ですが、かかりつけの医者は、検査結果を示すデータにのみ関心があるようで、私の生活や信条にほとんど興味を示しません。いわば、「病」は診るのですが、「病人」「病気」には無関心です。医者と患者の関係も「異文化コミュニケーション」です。しかし、私の場合、そこにあるのはコミュニケーションではなく、単なるデータのやり取りであり確認です。「信頼関係」の構築など望むべくもないのです。

ところで、「超高齢社会の介護と医療」を私自身の課題と考えて、児玉[2023]を読み続けています。その第五章「人生の最終段階の医療」の末尾にある次の言葉に注目しました。

人生の最終段階の医療についての「倫理」や法制度については、ひとりひとりの価値観や思いを反映して多様な考え方があります。それとともに、医療や介護のあり方や、広く見れば社会の秩序にもかかわる公共的な問題でもあります。だから、「社会全体」が、人生の最後をどう迎えるのかに関連した情報をもっと共有してもよいかと思います。また、病気になったときの、同じ病気の仲間との情報交換やカウンセリング（ピア・カウンセリング）なども大きな役割を果たしてもらえそうな気がします。そういう仕組みづくりに積極的に取り組む市民団体や医療施設も、しだいに増えてきています。

あなたはどうか考えますか（153頁）。

私は、「こう考えます」。ジェニーがそうであったように、高度な医療機関に身を任せるだけでなく、つまり高度な医療機器に繋がれ「データ」を提供するだけの生活ではなく、犬、猫、小鳥や愛する者たちに見守られ、癒されるような「人生の最後」を迎えたい、と。

（みやざき あきら）

大塚敦子[1997]『いのちの贈りもの 犬、猫、小鳥、そして夫へ』岩波書店

大塚敦子[2023]『動物がくれる力 教育、福祉、そして人生』岩波新書

児玉安司[2023]『医療と介護の法律入門』岩波新書

鳥飼玖美子[2021]『異文化コミュニケーション学』岩波新書

君は君のままで

竹内 真澄

浜崎あゆみ（1978～ ）のデビュー 25 周年記念番組を見ていて気付いたのは「君は君のままで」というフレーズがあったことだ。浜崎の最大のヒット・アルバムは「SURREAL」2000 で、そのメイン曲が同タイトルの歌である。その後浜崎は3年連続レコード大賞を取り、「平成の歌姫」と呼ばれ、時代の寵児となった。

浜崎の歌はすべて本人の作詞だ。この歌で浜崎は「ねえ君は君のままでいてね」と歌う。彼女の詩は哲学的で、すべて経験にもとづいていると言われ、女子中高生のカリスマとされた。男子はぼんやり生きているのに比べて、女子中高生は自立と愛について深い悩みをもっている。ゆえに、彼女の詩は現代社会の若者の琴線にふれる何かをもっていると言えるだろう。

私は、この琴線が何かわかっているわけではないが、「君は君のままで」というフレーズは、少なくともその核心の近くにあるものではないかと推測する。浜崎の出現以降日本の流行歌の中に「君は君のままで」が頻出するようになった。このフレーズを含む歌が今どうなっているかを調べてみたい。

歌は意識の一つの形態である。すると、意識を説明する方法を使って、解明できるはずである。ところが、私見の限りでは歌をきちんと解明する研究方法を見たことがない。だから、仕方なく私はただ長い間使ってきた思想史の方法をここでも使ってやってみようと重い腰をあげた。

歌は実にデリケートなものである。細やかな人間心情の機微が織り込まれているからこそ胸を打つ。ところが、この素材を私は、思想史と同様に、いわゆる「土台/上部構造」論で調理してみようと考えているのだ。見ようによっては、これほど「野暮ったい」ことはないと思う。それは、マサカリで葱を刻むようなことかもしれない。土台／上部構造論とは何か、手短に述べておこう。

歌は作詞家の胸と頭から生まれる。作詞家が生きている現代は、新自由主義の社会であり、ここで労働力は最高度に商品化されている。ある社会の経済的構造を土台と呼ぶ。リスナーはもちろん作詞家もまた、労働力が最高度に商品化された経済構造という土台の上で暮らしている。K・マンハイムの言う存在拘束性によって、歌手の才能を発掘し、楽曲を書かせるプロダクションとスカウトされて自分を表現するライターが「協業」して、楽曲は市場に出回り、それを聴くリスナーも同じ土台の上にそびえる社会で何かに感動し、喜怒哀楽にイメージを与えて生きている。

このようなマクロな社会の成り立ちと時代の動向の中に特定の歌の発生を読み解けるかどうか、が課題となる。私がなぜ土台／上部構造論などという古風な方法を使って作業をするかというと、いま述べた方法で歌謡曲を論じる学者がひとりもいなくなってしまったせいだ。このために、日本の社会心理学はひどく痩せ細ってしまい、魅力が失せている。私のような思想史研究者が、不器用なままで、こういうジャンルと向き合うことには、だから、ひょっとすると意味があるかもしれないのである。

1. 「君は君のままで」で検索

Web 上で「君は君のままで」で検索すると、221 曲ヒットする。大半は 2000 年代の楽曲であ

る。主たるものを年代別で表にすると以下のようなになる。

年	楽曲	作詞
2000	SURREAL	浜崎あゆみ
2009	あの空の果てまで	彩音
2010	青空片思い	秋元康
2013	おっぱい	石崎ひゅーい
2017	避雷針	秋元康
2017	Identity	Haderu
2018	Lemonade Feat..JP	JP THE WAVY. CzTIGER
2018	アメフラレ	Gacharic Spin
2021	君のまま	百足&韻マン
2023	浮かぶように	結城佑莉
2023	Smashing Time	RAKURA
2023	想わせぶりっこ	指原梨乃
2023	DRAMA	ユプシロン
2023	Never say goodbye	ChouCho
2023	卵	藍坊主

2000 年以前に例がないわけではない。「この街で君と暮らしたい」FIELD OF VIEW(小松未歩), 1997 などがある。歌謡史に突如切れ目ができるとは考えられないので、本稿では、便宜的に浜崎あゆみが一気に top をとった 2000 年を「君は君のままで」という一句の出現を記念する画期とみなすことにしておこう。

SURREAL (超現実) 浜崎あゆみ
好きなモノだけを 選んでくのが
無責任だってワケじゃない
好きなモノさえも見付けられずに
責任なんて取りようもない
背負う覚悟の分だけ可能性を手にしてる

いらないモノならその同情心
まるで役に立たないね
大事なモノならそこに必ず
痛み伴うはずだよね
ひとりぼっちで感じる孤独より
ふたりでいても感じる孤独のほうが
辛いことのように

どんなに孤独が訪れようと
どんな痛みを受けようと
感覚だけは閉ざしちゃいけない
たとえ言葉を失くしても
いくらどうでもいいなんて言ったって
道につまずけば両手をついて守っている
そんなモノだから

Ah 指切りをしたあの日の約束は
ひとりじゃ守りようがない
Ah 語り明かしたいつかの夢だって
ひとりじゃ叶えようもない
誰にも言えない誰かに言いたい
あの人が誰より大切って

la la la
どこにもない場所で
私は私のままで立ってるよ
ねえ君が君のままでいてね
そのままの君でいて欲しい

la la la
どこにもない場所で
私は私のままで立っているよ
ねえ君は君のままでいてね
いつまでも君でいて欲しい

浜崎の評伝『M 愛すべき人がいて』（小松成美著、幻冬舎文庫、2019）によると、浜崎は少女時代を過ごした福岡時代、友達は少なく、一人でよく海をみた。「心が鎖で縛られたようになると、波間を吹き抜ける風の中に立って深く呼吸をし、その息苦しさを追い払う」。芸能活動を始め、東京の私立の芸能活動コースのある高校に入るが、友達はメイだけであった。1994年16歳の時六本木にオープンしたヴェルファーレという店で、音楽プロデュース会社エイベックスが運営するディスコにメイと二人で年齢を偽って入場し、踊った。夜通し踊って、高揚した。17歳のとき高校を中退した。浜崎は、孤独で夢だけをもっていた。浜崎の主題の一つは、孤独である。孤独をかかえた人を孤独から救い出すものは愛だろう。だが、浜崎くらいになると、たとえ孤独を愛で満たしても、自分らしさを失いたくないと考える。上記の楽曲には「愛」という言葉はストレートには出てこない。その代わりが「約束」のように見える。私は私のままで、君は君のままで、夢を叶える約束を守ろうと言う。どんなに孤独でも、また痛みがあろうと、自分の感覚が一番大切だ。感覚を閉ざしてはいけない。私の感覚と君の感覚は違っているが、それを互いに尊重して夢へ向かっていこう。そういう大意である。

すこしまとめすぎるかもしれないが、浜崎の世界は、孤独をベースにしながら孤独を逃れようとするものである。だが現代的なのは、そのとき互いの「identity」を殺さず、ぎゃくに相乗化させたいということを含んでいる。昔の演歌のように「あなたの色に染められ」とは言わない。

2. 「ありのまま」と「競争」のあいだ

浜崎の「君は君のままで」は、おおいにヒットしたが、単独で孤立した歌ではなかった。時代の大きなうねりのなかにあった。たとえばSMAPの「世界でひとつだけの花」（槇原敬之作詞、2002）は、類似の志向性にたつものであった。「NO1にならなくてもいい、もともと特別なONLY ONE」とは、「君はきみのままでいい」という主張を、より通俗化して、NO1と対置している分だけ、「SURREAL」よりも具体的でわかりやすくなっている。つまり、頂点をめざす競争ではなくて、勝ち負けにない人の魅力を認めようというのが歌の趣旨であるといつてよい。

「花」のほうは競争/そのまま、という図式を持ち込んで、「そのまま」を擁護している。「NO1にならなくていい」というところは、もう少し分析すべきであろう。私のような者にどうも引っかかるのは、「ならなくていい」という言い方である。これは、現実にはNO1になれという競争主義が強いことを前提にしたうえで、でもそれに捉われなくてよいと言っている。

槇原のこの哲学は何を意味するか。NO1は一人だけしかたない。であるならば、NO1以外は価値がないのかというと、むしろ、そんなことはないと考える。競争というのは、特定の何かをめぐる競争であるから、一元的である。たった一つのモノサシに合わせて人間を序列化するのが競争である。けれども、そのモノサシは恣意的だ。別段、このモノサシだけが人間評価の唯一絶対基準とはいえないのである。だから、多様性 plurality を重視し、かつまた多様性 diversity を評価基準におけば、ONLY ONE の良さがわかるはずである。そのように槇原は言い、「非NO1」を救っている。私はそのように理解した。

槇原の ONLY ONE を「まんま主義」と呼ぶことにしよう。「まんま主義」は、現実にある競争主義を決して克服したわけではない。また克服したいとも思っていない。人はあいかわらず序列化、選別化のなかに置かれており、この世はまことに生き馬の目を抜くような人、超人間的な人間をみたがる。そのことを、決して否定することなく、でもね「君は君のままで」、たとえNO1でなくてもいいんだよ、それで十分「特別」だよと慰めるわけである。つまり「花」は気休めの歌である。

NO1になるためには切磋琢磨と精進が必要である。だが、もともと「特別」なのであれば、競争しなくても、そのままでもよいことになる。ありていに言えば、社会は、一方でNO1を喝采する。大谷翔平、藤井聡太がそれである。だが、誰でもが大谷や藤井になれるわけではない。だから社会は他方で「隅っこ暮らし」「世界の片隅」にも、正当な評価を与えることによってバランスをとらねばならない。そうでなければ、99%の人は価値がないことになってしまうだろう。人を追い詰めすぎてはならないのである。「NO1にならなくていい」というのは、topを目指さない態度を肯定するのだから、「なれなくていい」とは違う。しかし、NO1を競わせる経済構造を肯定しているのであるから、この「ならなくていい」は事実上「なれなくていい」にすぼんでいる。ぼくはここに引っかかる。簡単に言えば、この歌詞は中途半端なのである。

私がここで思い出すのは「花」が流行したころ、ある学生（4回生だったと思う）が「世界に一つだけの花」は偽善だと評したことだった。学生はそれ以上説明しなかったが、私には言わんとすることが伝わって来た。「選別的な現実があるにもかかわらず、何もせずとも特別な ONLY ONE でよい」などというのは嫌味だということだ。たとえば悪くて恐縮であるが、美人がブスをみて「とても個性的ね」とコメントするようないやらしさをこの歌に読み取ったのであろう。

浜崎あゆみの「まんま主義」は、彼女の評伝を読めばわかるように、愛と自立（identity）を求めるものである。そこに、学校と集団への違和感があり、詩が抽象的な分だけ、槇原のいやらしさを回避できている。たとえば彼女は「自立した心は、自分を子供として扱う学校に反発を繰り返した。いつも先生に怒られて、学校に呼び出された母親に怒られて、そこから逃げ出したくて。」と書かれている。おそらく、浜崎はすこし早熟で型破りで、学校や親とのタテの序列に合わない性格であった。浜崎と槇原の詩のどこがどう共通し、どこが違うかは難しいところであるが、槇原は序列を前提にしているが、浜崎はそれを無視しているところであろう。

そのように両者を一応区別できるのではないかと考えるが、リスナーがここまで考えて歌を聴いたかどうかは実証できない。いずれにせよ、浜崎と槇原の「まんま主義」は、おそらくごっちゃにされたまま、競争主義、序列主義、選別主義に対して自立、個性、特別さ、identity を重視するものとして受け入れられていったのだ。その程度の毒消しの文化を提供する意味をもっていたのである。そのかぎりでは、2000年ころの「まんま主義」は決して体制を変えるものではないが、エリート主義の毒を中和するくらいの仕事はした。

3. 「進化」と「まんま」

「君は君のまま」に戻ると、人間は歳をとるし、時代の中で変化する。痩せた人が太ったり、万物は流転することを免れえない。では、「まんま主義」は変化をどう処理するのか。「頑張れ」か、それとも「頑張るな」か、歌はだいたい二つに分かれる。本来の「君は君のままでいい」とはどういう意味だったのだろうか。それは、人間を原石、加工品、完成品と分けた場合、原石を認める立場であった。だから、最もストレートなのは原石のままでよいから「頑張るな」という歌になる。

① <まんま主義 頑張るな派>

「そのまま」を文字通り取れば、元のままである。元のままでよいなら、頑張らなくてもよいし、人工的な努力は不要である。この例は上記の表では「情熱イズム」、「明日はくる」、「君のまま」、「騎士」、「Always」などだ。

② <まんま主義 頑張れ派>

理屈はさておき、「ありのまま」に頑張れというものがある。例は「それぞれの場所」、「群青」、「エール～頑張る君へ～」「ラジオネームいつかのキミ」「フレー！フレー！キミ」などである。こちらの歌は、「頑張れ」という。けれどもそうすると「まんま主義」の枠を壊しはしないか。頑張りつつ「君らしさ」はキープしてほしいという。だが頑張ったら「まんま」の枠を壊すかもしれない。歌詞をよく読むと、論理的な極限はごまかされており、どうなるかは曖昧である。

③ 上記2つのいずれにも分類できないのは、「DRAMA」SODA KIT（作詞はユブシロン）の歌2023である。「『君は君のままでいいんだよ』って言われたときに、変わりたい。本気でそう思ったんだ」と歌う。これは、「君のまま」のフレーズを使っているが、「まんま主義」を根底から否定するものである。

さて、2000年から浜崎あゆみによってはじめられた「まんま主義」は、「花」とともに、競争、上下、比較、NO1主義などにたいする抵抗であった。しかし、おそらくほかの作詞家たちは研究したのであろう。後になると秋元康や指原梨乃のような有名な作詞家やタレントも使い始め、2023年時点では221曲にもものぼるほど当たり前のことになってしまった。悪く言えば、「手垢にまみれたフレーズ」になった。

しかし、たとえマンネリであってもこのフレーズは簡単には消えないくらい強い。私はweb上の表示に限界があったために221曲を全部読むのはやめたが、100曲で十分だった。論理的に言って、上の3つの箱にすべてはいることがわかったからだ。いまなお「君は君のままで」は大量につくられている。なぜ、「まんま主義」は、たとえマンネリであっても、これほど大量化し、定着したのであろうか。それには理由があるだろう。

4. 階級と個別者 (Einzelne)

何を言いたいかというと「まんま主義」が日本の階級構成を示しているということである。現代日本は資本主義である。とりわけ、新自由主義が蔓延し、政府の用語で言う「自立した個人（自己責任）」を目指す社会である。これによって人びとの分断と孤立化は実に甚だしい。とりわけ1995年ころを境に、なかんずく小泉政権以降強制された「目立主義」が大衆現象となった。私の記憶では、当時の国会で、格差社会について問われた小泉は、「別に格差があるのは当然じゃないですか」と答えた。質問した野党議員も格差が悪であるとまでは言えない雰囲気、少なくとも当時は、あった。

いったい適度な格差とは何かということについて、社会学者は答えていないと思われる。

格差というと一本のタテ軸を認めて、定量的なものと思い込んでしまう。すると、「格差社会」の反対概念は「格差のない社会」ということになる。そうであるならば、一本のモノサシで定量化して格差を消さぬかぎり「非格差社会」は不可能であるから、所得、労働時間、教育、福祉サービスなどを全員平等にせよということになってしまう。しかし、単一のモノサシで定量的に測られる完全平等な社会などは現実的ではないし、人の望むものでもあるまい。だから、格差を批判する場合、完全平等のようなイメージで「非格差社会」を対置してはならない。一本のモノサシでは窮屈だから、多数のモノサシで測るというのもあるまい。多数のモノサシを導入するだけであれば、一層息の詰まる選別が横行するかもしれない。格差社会の批判の核心にある問題は、さしあたりは生存権の問題であるが、結局は権力の問題である。生存権について「生きさせろ」というコピーが物語るように、詰めていけば憲法第 25 条を完全実施せよということになる。だから「生きさせろ」は、公論による政治的意思決定の強化を求めている。つまり、これまで生存権を無視してきた政治を生存権の完全実施の意志に服従させようということである。したがって、私の考えでは、格差社会批判の核心は、意思決定から排除された者（ほとんどの国民）が国政運営上の権力の非対称性を問題にするもので、最終的には非正規労働者や失業者もふくめた弱者を重んじろという権力者/弱者構造の是正を求めるものだと思う。

それはともあれ、政治的には一人 1 票で平等であるが、それで十分ではない。なぜなら、選挙と選挙の間の中間期間に、政府が意思決定を独占して憲法を逸脱することは始終あるからだ。また、経済は実に大量の人びとの協力で回っているのに、CEO に全権を与え、賃労働者や非正規にはなんの権限も与えないのはよくない。賃金を上げよ、過労死は許さない、非正規の待遇を上げよなどの主張に特徴づけられる格差社会への批判は、突き詰めていくと政治や経済の意思決定に権力の偏重があることを突くものである。すなわち、意思決定への民衆の個体的参加という質の保障こそが格差社会の反対概念なのである。当然、社会に承認される個体として参加したいというときには、その人の Identity、他の人との差異 difference は保障されねばならない。

さて、話を浜崎にもどそう。デビュー前に専務 M に言われて NY に渡った浜崎あゆみは、「競い合う意識のない私」（同、50 頁）であった。それでいて、私らしさにおおいにこだわっていた。「小学校の通信簿にも、6 年間、協調性の欄に『努力しましょう』と書かれていた」（同、59 頁）「人に合わせようとすることに意識が向くと、途端に自分らしさが消えていく。集団の中で上手に動かず、そんな自分を責めて心が凍り付いてしまう。一人でいれば、人の顔をうかがわず、自分のペースで生きることができる。カラフルな自分を際限なく表現することだってできるかもしれない」（同、60 頁）このように彼女は、愛と個性を同時に求めていたが、新自由主義的文化とは折り合いが悪かった。新自由主義の言う「自立した個人」は彼女の求める愛と個性（自分らしさ）と別ものであった。

居場所がなかった 見つからなかった
未来には期待できるのか分からずに
いつも強い子だねって言われ続けてた
泣かないで偉いねって褒められたりしていたよ
そんな言葉ひとつも望んでなかった
だから解らないフリをしていた

これが初めて作った歌詞の一部である。新自由主義とは、階級を私人（自立した個人）に還元する現象である。私人というのは、民間領域で利益と名誉を競う人間のことである。この前提を皆が共有してしまえば、結果として利益と名誉というモノサシに量的な格差が生まれるの

は当然と見なされる。私人とは「モナド」であって、閉鎖的で排他的な人間のことだ。浜崎は、もともと「強い子」になりたかったわけではない。もっとまろやかな愛と個性をもとめていた。それらを与えてくれる落ち着ける居場所が欲しかっただけだ。

おそらく浜崎を愛した女子中高生も愛と個性をくれる居場所への情熱をもっている。彼女たちは男子よりも複雑である。なぜなら彼女たちには、①専業主婦の道が残っている。②女性の社会進出が進んでいる。③新自由主義による非正規化が希望を打ち砕く。そういう三要素のなかで彼女たちのアイデンティティが混乱させられるからだ⁽¹⁾。男子はもっと単純で、勉強やスポーツに打ち込めば、あとはなんとかなると考えている。女子は違う。愛と幸福な家族と仕事の3つが全部得られるかどうか、不安定なのだ。このために恋愛（ロマンティズム）、経済的自立、いわゆる「ガラスの天井」が絡み合い、もつれている。それを解決してくれるロール・モデルを女子中高生はもとめているのである。浜崎はロール・モデルとなった。

だが、歌姫と呼ばれ、スターになった後から見れば、実に悲惨なことであったが、浜崎が愛した音楽プロデューサーは、愛とビジネスを天秤にかけ人だった。当初、愛とビジネスは一体化していた。だが、徐々に分裂する。個体（愛）を求めることは私人（ビジネス）であることと相容れない。

もしも人間がすべて私人であるならば、完全に等質であるから、原理的に階級は存在しない。質の異なる集団が階級なのである。一元的モノサシで序列化された人々がグラデーションで垂直に並んでいるだけであるなら、この連続性を分断する階級線はないに等しい。小泉前首相がそう思っていたように、格差は、努力のグラデーションの結果なのだから、存在しなければならぬことになるが、小泉首相は日本が階級社会であるとは認めないはずである。私人論の眼鏡で社会を見ると、階級社会は見えなくなるのである。

だが、階級は客観的に存在する。生産手段の所有者とそうでない者は、質的に違う。人が自分をどの階級に帰属すると考えようとあるいは考えまいと、統計上の階級は客観的に存在する。

現代日本では、階級構成 class composition を語ることはできる。人口の85%は賃労働者である。賃労働者は、政治的に組織されておれば対自的な階級的な存在である。だが、そこまでいかないでただ統計上存在するだけならば即自的階級にすぎない。年次労働組合組織率は低下し続けているし、階級政党とされる某政党は常時3%程度の支持率である。

いままさに現代日本にあるのは、圧倒的即自的階級であって、対自的階級ではない。ゆえに階級構成（統計 class composition）は語れるが階級構造（対自的組織 class structure）は、はっきりしない。

だから、人口の85%は労働力の商品化に無規制で巻き込まれている。年々その比率は増加する。この意味で、労働者階級は大量化する。だが、大量化しても私人化せしめられ、るならば、内部でますます人は個別化 Vereinzelung する。だから私人化こそが現代人の孤独の根源である。私人は、将来社会をどう作るかに関する意思決定に参加できないが、労働力商品として始終泳がされるのだから、たまったものではない。それでも、就職し、それなりに地位を確保すれば、相対的に、落ち着きはする。現代人の孤独を集中的に感じるのは若者である。そして男子よりもおそらく女子の方が疎外感が強いだろう。

はやり歌を扱う意味はここにある。浜崎のように愛と個性を求めると、反序列、反学校文化、個性重視、identity の追求とならざるをえない。それは人の胸を打つ。とりわけ女子中高生を共鳴版とする。評伝にこうある。

自分は人とは違うのだと感じていた。茶色の髪がカールして人目を引くことも、目が大きく色が白くて外国人のようだと言われることも、博多の街中でスカウトされ小学生モデルになったことも、すべてが自分と向き合うきっかけだった。誰かの真似をすることもされることもない人生。それを実感して歳を重ねた。そんな私を、いつも、大好きだよと、言ってくれたおば

あちゃんの愛情が私を育ててくれた。そして、おばあちゃんを思う心が、私を芸能界へ向かわせた。小学生でも、中学生でも、仕事をして金を稼ぎ、家計を支えることは、私の自然な役目だった。（同、75 頁）

日本の女子中高生は、これほど率直に自分を語れる人間を見て、感動したのではないか。なぜなら、皆多かれ少なかれ理由は言えないが、心から好きになれないものに囲まれているからだ。そこに内面の「ささくれ」（中島みゆき）と抵抗がある。その抵抗を言語化する人を彼女たちは待っていた。そこへ浜崎あゆみが現れたのだ。

1995 年以降の新自由主義時代の歌はどうなっているか。それは、競争に対して「まんま主義」を対置して闘っているわけである。つまりアンジツヒな次元では数が増大するが、まだ対自的ではなく、「抵抗」のエネルギーはあるから、ミラーボールの下ではじけたり、TOHO キッズになったり、様々な方向や様々な形態となって現れる。政治は、野党と市民の連帯と言っており正しいが、歌謡曲の戦線ではジャンルが違うので、これらは必ずしもオーバーラップしない。だから浜崎は、自分の言葉でたたかったのである。

「国民のなかの一部分が、他の部分の隷属化のために自分が利用されていることを許しているかぎりだけで、つまり民衆の無知 Massendummheit が支配しているかぎりだけで、階級支配は存続できる」⁽²⁾とマルクスは言っている。この言葉は異様に深い。「民衆の無知」は、高度情報化社会や高学歴化社会と矛盾しない。なぜなら、情報化や高学歴化自体が分断をもたらすからだ。それらが、多くの場合、個別化 Vereinzelnung の梃子なのである。この結果、浜崎がそれを感じたように、皆が孤独である。

労働力の商品化のゆえに、人は学歴や企業規模や所得や住宅や年金を目指し、生活をこしらえていかねばならない。しかし、それはとても孤独な行為である。浜崎は、もともとからすれば、新自由主義と無縁であった。しかし、ひとたびプロデュース会社によって「売れ筋」に指名されるとそうはいかない。尊敬するMと結婚し、ただ一緒にいたいと願ったのであったが、Mは人が変わったように「歌手浜崎あゆみ」を売りまくるセールスマシンとなり、一人の女性を愛する男になれないのである。「国民のなかの一部分が、他の部分の隷属化のために自分が利用されていることを許しているかぎりだけで」、つまり「恋人のあゆではなく、歌手の浜崎あゆみ」（119 頁）を利用するようになるときにだけ、Mは名プロデューサーになれる。Mは「あゆ」という人格を捨て、歌手浜崎あゆみだけを盗んだ。それが現代の「無知」である。無知は愛と相容れない。

これらの様々な形態の「無知」と対決することは、歌の世界でどのように進行するのか。愛が得られたとき浜崎はこう書いた。

長い夜もやがて明ける様に
自分を信じて ひとつ踏み出して
歩いていけそうな気がするよ

届きたい いつか私は私に
あなたから見つけてもらえた瞬間
あの日から強くなれる気がしていた
自分を誇ることができるから
あきらめるなんてもうしたくなくて
じゃまする過去達に手を振ったよ
初めて私に教えてくれたね
何が一番大切かを

あゆが歌手浜崎あゆみと分裂していく過程で、愛が破綻した。「私たちの成功が、二人の幸福のゴールになると信じていた私は、すぐに夢を叶えられる、と有頂天になって・・・マサとの静かな生活を送れると、思い込んでいた。だけど・・・。何かが変わっていった。あんなにぴったり合っていた私とマサ（M）の歩幅が、ほんの少しずつずれていって、気が付くと個々の場所に立っていた。春から夏を迎える頃には、二人の間の空気は徐々に張り詰め、ぎしぎしと軋み、心がすれ違っていくのが感じられた」（122 頁）

このようにして、「あゆ」は歌姫となって 2000 年には成功した。エイベックスの専務 M は彼女を発見し、育て、売り出したが、「歌手」を成功に導くかたわらで「恋人」を捨てたのである。いま経済的に成功した浜崎あゆみは、10 数億円と言われる豪邸に住み、喪失の中で耐えているのだろうか。

5. 「君は君のままで」の階層分布

作詞は、すぐれて文化的な創発的行為である。作詞家は、想像できる民衆に言葉が届くようにそれを彫琢する。ばらばらな個別者 Einzelne から個体 Individuum に転化する可能性をさぐり、絶えず「無知」の諸形態と対決する。個別者は、一人ぼっちで不安であり、「連帯」「愛」「やさしさ」「癒し」「identity」を求めている。浜崎あゆみや槇原敬之の作詞活動は、新自由主義が生み出す全体主義的競争主義に対抗してきた。「君は君のままで」とは抵抗の表現であった。少なくとも毒消しの仕事をした。ところが、いま(2023 年)「まんま主義」はそれほど新鮮ではない。すでに秋元康や指原梨乃のような人が「まんま主義」を取り込み、「君は君のままでいい」と言い始めた。ここで分析はしないが、彼らの「まんま主義」は完全に牙を抜かれ、槇原程度のささやかな抵抗さえ消えている。秋元や指原の歌詞は、いわば毒のない「猫なで声」にすぎない。抵抗のない現状維持である。

新自由主義には幅がある。一方的に「がりがり亡者」「人でなし」「不人情家」「冷酷者」「残酷者」をすすめ、もたらすわけではない。新自由主義も成熟すると 99%を取り込まねばならない。すると、「小さい政府」「身を切る改革」「自助自立」で人々をへとへとにさせると同時に一定の「癒し」も提供する。

おそらく、新自由主義の格差のなかへ「君は君のままで」は包摂されるようになった。日本は即自的（統計的）階級社会である。最も上層で、実力でエリートになるものは、③の歌のように「君のままで」と言われても「このままではだめだ」と感じて「変化」を決断する。エリートは機転が利くから、「まんま主義」を拒否して上へ行く。だから、この階層はさすがにつかれた時には「まんま主義」の歌を聴くかもしれないが、本質的には秋元や指原のほうを好んで聴くだろう。

エリートの下の大膨大な中流層はどうか。すなわち③を目指しいても夢を実現できない者は、②または①を好んで聞くだらう。②は「君は君のままで」まだ「頑張る」。大量の中流層はこれを聞いているのではないか。

だが、もっと下層になると頑張るのはあほらしくなる。つまり②も無理だとなったら、谷底に落とされても、谷底で生きていきやあいいさという感慨をもつだろう。そうした者は①を消費するだろう。原石でいい。「俺はまだ本気をだしてないだけ」だ。

冒頭で述べたように、現代社会は「進化」と「まんま」を表裏一体とする。両面は一人の中に同居する。昼は「進化」し、夜はほっとして「まんま」でよい。だが、昼の進化に一杯一杯でしんどすぎると感じる者もいる。だから、「進化」と「まんま」は、一人のうちに同居する。しかし、「進化」と「まんま」の混合比率は異なる。階級社会の諸階層には「進化」が多いものが上に立ち、中層では五分五分だ。下に下がるにつれて「まんま」が「進化」を上回る

だろう。

こうして、上の社会層ほど「進化」が「まんま」を圧倒し、下の社会層ほど、「まんま」が「進化」を圧倒する。低賃金で、へとへとになって12時間以上仕事漬けになっている者は少なくない。この人々が「進化」をすんなり受けいれるとは考えられない。「進化」派は、エネルギーとチャレンジ意欲に満ちており、まさに現代版「資本主義の精神」（M・ウェーバー）そのものだ。これにたいして、「まんま主義」は、競争主義の毒を消すという文化的意義を担いはしたが、「進化」派のヘゲモニーにたいして、受動的 passive であり、客観的に見れば従属している。「進化」を諦めた「まんま主義」は、そうありたくてそうになっているわけではないから、このままでは「無目的」「無表情」「無感動」「無関心」に陥りやすい。

槇原の「まんま主義」が一部から偽善だと言われたように、ブレークスルーの力をもちえぬまま、腐敗する可能性はある。この意味で、歌謡界では、無害な秋元や指原梨乃によって養分を吸い取られた浜崎と槇原は、劣勢におかれているのかもしれない。

おわりに

私は、今回浜崎の歌詞を読んで、ささやかな分析を試みた。この作業を通じて女子中高生が浜崎を支持した理由が少しわかったような気がした。彼女たちは、体制（大勢）に不満をもっていた。その後この不満を吸収するかのように「すべての女性が輝く社会」（2014年、安倍晋三の政策を粉飾するコトバ）というコピーが振りまかれる。これは、いつもの言葉であったが、2000年ころの状況で彼女たちは、男性中心社会に直面しており、一見すると「箸を転がしても笑う」ような生活を楽しそうに送っているように見えるが、愛と個性をえるための見通しの悪いところに押し込まれていた。彼女たちは自力で「進化」する困難に直面し、「君のままでいい」と言ってほしかったが、同時にその歌詞をつくった浜崎自身が自分を貫き、「進化」と「まんま」を両方手に入れるのをみて熱狂した。それはまさしく女子中高生の憧れであっただろう。

しかし、浜崎の恋人Mは「私人」であり、ますます私人化した。彼は、浜崎が求めた「個体」になりえなかった。「私人」間で愛は成立しない。M側から言えば、商品である浜崎あゆみ売ることはできるが、愛することは不可能であった。

注

（1）専業主婦、賃労働者、非正規労働者のいずれになるかは、女性が自己をどう作るかに決定的影響を与える。これは、潜在的過剰人口、労働の社会化、流動的過剰人口のどこに自らを位置づけるかをめぐる葛藤を女性にもたらす。

（2）ヨハン・モスト原著、マルクス加筆・改訂、大谷禎之介訳『マルクス自身の手による資本論入門』大月書店、2009、168頁。

（たけうち ますみ）

おじさんの歌

竹内 真澄

1. 歌われたアメリカ・・・ビリー・ジョー・アームストロング（1972～）

（1）GREEN DAYの「アメリカン イディオット」2004

馬鹿なアメリカ人なんかになりたくないね
メディアの言いなりの国民なんてまっぴらだ
ヒステリックなざわめきが聴こえるだろ？これこそアメリカのサブリミナルな洗脳だ
新たな緊迫情勢の始まりさ 移民の国の全域で
何もかもがおかしくなっている
テレビは明日の夢を語るけど 俺たちはそんなの信じないぜ
話し合っても無駄だね 俺ってアメリカのホモ野郎かも
保守層のアジェンダとやらはシックリこないし
今じゃどいつもこいつもプロパガンダをやってるし
妄想の時代を謳歌する 新たな緊迫情勢の始まりさ
アメリカの全域で何もかもがおかしくなっている

2001年のNY 貿易センタービル同時多発テロ事件後、アメリカのJ.W. ブッシュ大統領はイラク戦争を、国連決議に反して、行った。イラクのフセイン大統領は殺され、体制は崩壊した。後になって、戦争全体が誤った前提にたっていたことが報道された。2004年、イラク戦争のさなか、アメリカのロック・パンクバンド グリーン・デイは、「馬鹿なアメリカ人」という歌で対抗した。全米（Billboard 200 など）・全英（UK Albums Chart など）、ともに1位を獲得。また、全米で6x プラチナム（600万枚）、全英で7x プラチナム（210万枚）を獲得するなど、大きな売上を記録した結果、2005年のグラミー賞「最優秀ロック・アルバム賞」を獲得した。GREEN DAYは売上金をインド太平洋大津波の被災地に寄付したとされている。

歌詞を書いたB・J・アームストロングは彼のHPでこういう個人観をもつことを打ち明けているのは注目すべきことである。

Minority is about being an individual. It's like you have to sift through the darkness to find your place and be that individual you want to be your entire life.

少数派だということが一人の個体になる始まりなんだ
それは、君の居場所を見つけるためには暗闇を通っていかなくちゃなんということだ
全人生をかけて君がなりたいたいと思う個体にならなくちゃね

ここに、彼のロック魂が表現されているように思われる。これは、アメリカ社会が「自由な個人 free individual」をもたらす「偉大な社会 Great Society」だというF・ハイエクやM・フリードマンら主流派経済学の主張とはまったく正反対のものである。また、アメリカの有名なTV番組「ザ・エレン・ショー」は当時引っ張りだこのグリーン・デイを出演させた⁽¹⁾。

(2) Mr.Children 「1999 年、夏、沖縄」 2000 年

僕が初めて沖縄に行ったとき
何となく物悲しく思えたのは
それがまるで日本の縮図であるかのように
アメリカに囲まれていたからです

Mr.Children のボーカル歌手桜井和寿(1970～)は、2001 年坂本龍一 (1952—2023) と組んで地雷撲滅を訴えたり、ap bank という社団法人をつくって、環境保護、自然エネルギー促進事業、を提案している。この曲を私はたまたまラジオで聞いたので、放送禁止ではない。ただ、いくぶん踏み込んでいるのは、沖縄には米軍基地があると言っているのではなく、日本全体がアメリカに囲まれている、ということだ。これが桜井 30 歳の歌詞だ。

(3) 長渕剛 (1956～) 「静かなるアフガン」 2002、「親知らず」 2006

「静かなるアフガン」 2002

海の向こうじゃ戦争がおっぱじまった
人が人を殺しあってる
アメリカが育てたテロリストを
ビン・ラディンがもぐらになっちまってる
ブッシュはでっかい星条旗を背に
ハリウッド映画のシナリオをすげかえる
悪とたたかうヒーロー
アフガンの空 黒いカラスに化けた
ほらまた戦争かい ほらまた戦争かい
戦争に道などありやしねえ
戦争に正義もくそもありやしねえ
ほらまた戦争かい
黒いカラスにぶらさがる日本人・・・

「静かなるアフガン」は放送禁止となったため、長渕は仕方なくライブで演奏する。彼は「納得がいかねえ」と客に愚痴る。

「親知らず」 2006

俺の祖国日本よ！どうかアメリカに溶けないでくれ！
誰もが我が子を愛するように
俺の祖国日本よ！ちかごろふざけすぎちゃいねえか！
もっともっと自分を激しく愛し貫いてゆけ

長渕剛は、少し変わり者だ。日の丸と君が代が大好きで、ライブで国旗を振りまわして、1 万人で「君が代」を歌ったりもする。自衛隊に寄り添う反戦の立場と言われる⁽²⁾。だから既成の政治的図式では色分けしにくい。桜井が静かに日本の対米従属を見ているのに比べると長渕は強烈に、鮮烈に、詳細にナショナリストであり、かつまた反戦である。

以上、日米のおじさんの歌をとりあげたが、グリーン・デイ、Mr. チルドレンの歌は放送された。しかし、長渕の、とくに「静かなるアフガン」は事実上の放送禁止であった。この問題は、日米の放送コード⁽³⁾を考えさせるので次章で検討する。

2. 日本民放連の放送コード

ここでも土台／上部構造論で歌の世界を分析してみよう。資本主義の土台は、労働力の商品化で成立している。これを擁護するためには、労働者の頭を管理しなくてはならない。生活するためには労働力を売る暮らしが当然であるという意識を持たさねばならない。だから、労働力商品化の土台のうえに、民間企業が生まれ、放送はこのシステムをメンテナンスする。最終的に国民国家は、民間領域全体を支配者側から管理する。労働力商品化→民間企業→放送→国民国家というシステムが形成される。そしてひとたびこれができあがると、今度は上から国民国家→放送→民間企業→労働力商品化の順で、イデオロギーが現場化されていく。上部構造は、土台を守るうえで実に能動的でなくてはならない。

長渕の「静かなるアフガン」が放送禁止になったのは、憲法第21条で保障された表現の自由の限界を超えたからではない。第21条を素直に読むと、どうしてこれが表現の自由に抵触するか理解するのは難しい。では何が引っかかっているのか。民放連の放送基準が壁になっているのだ。放送基準を引用する。

日本民間放送連盟 放送基準

2022年5月26日改正 2023年4月1日施行

前文

民間放送は、公共の福祉、文化の向上、産業と経済の繁栄に役立ち、平和な社会の実現に寄与することを使命とする。

われわれは、この自覚に基づき、民主主義の精神にしたがい、基本的人権と世論を尊び、言論および表現の自由をまもり、法と秩序を尊重して社会の信頼にこたえる。

放送にあたっては、次の点を重視して、番組相互の調和と放送時間に留意するとともに、即時性、普遍性など放送のもつ特性を発揮し内容の充実につとめる。

1. 正確で迅速な報道
2. 健全な娯楽
3. 教育・教養の進展
4. 児童および青少年に与える影響
5. 節度をまもり、真実を伝える広告

次の基準は、ラジオ・テレビ（多重放送・補完放送を含む）の番組および広告などすべての放送に適用する。ただし、18章『広告の時間基準』は、当分の間、多重放送・補完放送には適用しない。

【放送基準の運用に関する注記事項】

- ・ 条文中「視聴者」とあるのは、ラジオの場合「聴取者」と読みかえるものとする。
- ・ 番組に関する条文であっても、その基本的な考え方は広告に適用され、広告に関する条文であっても、その基本的な考え方は番組に適用される点に留意する。

- ・ 条文・解説文においては、放送による広告を指す用語として「コマーシャル」と「CM」を併用している。特に「CM」は、タイム・スポットなど種類に着目した場合や、特定の商品・サービスの広告を示す場合に使用している。
- ・ 放送基準審議会見解や留意事項などはその時々の方考え方を示しており、その中で引用される放送基準は、その後の放送基準改正を必ずしも反映していない。

2章 法と政治

- (6) 法令を尊重し、その執行を妨げる言動を是認するような取り扱いはしない。
- (7) 国および国の機関の権威を傷つけるような取り扱いはしない。
- (8) 国の機関が審理している問題については慎重に取り扱い、係争中の問題はその審理を妨げないように注意する。
- (9) 国際親善を害するおそれのある問題は、その取り扱いに注意する。
- (10) 人種・民族・その国や地域の人々に関することを取り扱う時は、その感情を尊重しなければならない。
- (11) 政治に関しては公正な立場を守り、一党一派に偏らないように注意する。
- (12) 選挙事前運動の疑いがあるものは取り扱わない。
- (13) 政治・経済問題等に関する意見は、その責任の所在を明らかにする必要がある。
- (14) 政治・経済に混乱を与えるおそれのある問題は慎重に取り扱う。

ここで第2章「法と政治」を検討しよう。長渕の歌は、下線を引いた(7)～(11)に抵触すると考えられたのではないか。(7)の「国」とはむろん山河や領土ではない。政府のことである。この規定は、1954年に塚田十一郎(1904—1997)郵政大臣(当時)が「時の権力に一方的に盾突くような偏った放送が行われないような法的措置は必要」と発言したのを契機に1959年に現在の放送基準の原型が成立し、公布された。当時の郵政大臣の発言は現在の日本の民主主義観からしていかがなものであろうか。

ふつうの教科書は、民主主義とは、国民を主権者と位置づけ、国家(政府)の権威をつねに監視するべきものであると教える。言い換えると、国家の権威 authority を批判することによって初めて民主主義は維持されるといえる。批判しなければ、国民は簡単に権威主義 authoritarianism に陥る。また(8)で、たとえば沖縄基地問題を例に挙げると、沖縄振興特別措置法(2002)の改正案は、内容からして、対立しうる論点を含んでいた。改正内容で「民間主導の自立型経済の構築」との文言が入ったからだ。だが、民間主導では限界がある。日米政府間で基地削減交渉をしなければ民間経済には手が負えない。「沖縄の自立的発展」(第1条)のためには国家が介入して米軍基地を削らねばならない。この意味で特別措置法改正案は政府と沖縄県の対立を起こす。しかも、憲法第95条によると「ひとつの地方公共団体のみに適用される特別法は・・・その地方公共団体の住民の投票においてその過半数を得なければ、国会は、これを制定することができない」と県民投票を義務づけている。しかるに、第154回国会(2002年3月29日)の投票では先立つ県民投票はないまま、衆参両議院に法案が提出され、自民から共産まで、また大田昌秀氏まで含めて全会一致(つまり反対はゼロ)で可決した。係争問題どころか、このような「全会一致」を憲法違反と報道すべきではなかっただろうか。民放連はその機能をこそ期待されていないか。また(9)国際親善を広くとれば、アメリカを批判することはできない。あるいは(10)のブッシュの支持層である共和党を考慮すると、イラク戦争を批判することもできない、ということにならないであろうか。

さらに(11)「政治における公正」とは何か「一党一派に偏らない」とは何か、およそ第二次大戦後の放送界のコードとは考えられない反民主主義的な条文が、1959年のまま84年間も温存されている。民放連の放送コードは、憲法第21条違反である。

これらが何重にも表現の自由を狭めているから、アーティストは、けっきょく政治には触れないということになりやすい。2004年アメリカのTVとBBCは、GREEN DAYの「American Idiot」を放映した。それはグラミー賞を取ったからではない。放送したからグラミー賞を取ったのである。米英のように直接空爆に参加した国の放送でさえ、反戦歌を放送した。ところが、アメリカに追随しただけの日本（当時小泉政権）では、長渕の歌を流さない。

なぜか。どうしてこういうことになるのか。放送法が憲法違反だと野党が問わないからだ。また個々の歌手が戦闘精神をもって憲法に訴えないから放送禁止のままなのだ。長渕氏はLIVEで愚痴だけでなく法廷で戦うべきなのである。立派な憲法のある日本には、憲法を民間レベルで封印する奇妙な放送コードがある。民は官以上に官である。民法が放送しないものをどうしてNHKがやるだろうか。長渕が紅白歌合戦で「静かなるアフガン」を歌えるはずはないだろう。

日本は自由な市民社会ではないという説がある。民放連のコードを見る限りこの説に反対することは難しい。民放連が率先して市民社会を壊している。歌手は、若いころは恋愛を歌う。だが、成熟するにつれて、戦争や環境や格差を歌うだろう。人間として当たり前のことである。ところが、日本の歌手は素直に成熟できない。皆放送コードに押さえ込まれて伸び悩んでしまう。

おわりに

「現代社会と意識」という主題を、歌を素材に考えてみた。歌の世界には、新自由主義の締め付けに抵抗する歌がある。GREENDAYやMr.Childrenや長渕剛だ。彼らの歌は、さしあたり戦争に反対し、アメリカのメディア支配や戦後の日本の対米従属に懐疑的だ。これらの歌は、長い連鎖をへて、最終的には労働力の商品化の体制に小さくない影響を与えるかもしれない。体制にただ従順に適応することが正しいとされるときに、そこから距離を取ることは容易なことではない。エリクソンは、初期のIdentityをめぐる有名な研究で、ルターとフロイトを比較し、「それぞれの時代における汚れた仕事を引き受けようとする不屈の意志」がいかにして生成するか、しかもまた「自らの苦悩を表現し記述する情熱」がこのこととどのように関係しているかについて深い研究を残している⁽⁴⁾。私としては、別に偉人のように生きろなどと人に説く理由はない。また、社会派になれと言いたいわけでもない。ルソーがかつて言った人間の「第二の誕生」にとって歌一曲が与えるインパクトは決して小さくはないと言いたいだけである。従来「べき論」で処理されてきた領域に隠された客観的心理メカニズムが横たわっていることが対象化されねばならない。

この意味でおじさん世代は決して完全に無力というわけではない。GREENDAYの歌は、たとえばG・ブッシュの戦争責任の追及までいたりえなかったにせよ、歌手としては上出来だ。アメリカのメディアは、かつては日本と似た自主規制的な放送コードをもっていたが、いまはそうしたコードを廃止した。またコードがあった頃も、歌が反戦的であるからとか、国家の権威を傷つけるという理由で放送しないなどということはなかった。

日本では、委縮した民間領域が戦後できあがり、むしろ新自由主義に対応して放送界はさらなる圧力を加えられている（高市早苗総務大臣の「電波を止める」発言、2016年2月8日）。日本民放連は高市に反論したが、そもそもの放送基準が「時の権力に一方的に盾突く」ことをしめせんと約束したようなものだから、権力者がつけ込む「シャーレ（ペトリ皿）」を与えたようなものである。民放連には有識者やマスコミ研究者が「放送倫理・番組向上委員会」などに名を連ねている。だが、本質的な意味でどの程度民主主義を理解しているか、疑わしい。日本の歌は、①政府②放送業界③民間企業体制に管理統制されているので、民衆の気持ちはなかなか表現されない。歌から民衆意識をさぐる研究は、透明な表現が可能であることを前提に

してはじめて意味を持つが、まずそのまえに自由に歌を作れる条件が整わなくてはどうしようもない。歌が三つのセクターで管理されていることを取り除くところから民主主義化が始まると言えそうである。

注

- (1) The Ellen DeGeneres Show(2003-2022), NBC 直営局 10 局で放送。放送時間は月曜日－金曜日 15:00-16:00、土曜日－日曜日 29:00-30:00 のときもあったが、2012 年 10 月から翌年まで 20:00-21:00 のゴールデンタイムに進出した。日本の「徹子の部屋」のような番組である。
- (2) 2011 年 12 月 20 日、長渕剛は、市谷駐屯地で一川保夫防衛大臣から東日本大震災の救援活動にあたっている自衛隊員を激励したとして、特別感謝状を贈呈された。
- (3) アメリカの TV の放送コードは、全米放送事業者協会 NAB によって制作され、1952 年から 1983 年まで有効であった。コードの主たる目的は CM 規制であり、番組内容には「事実、公正、偏見なし」程度の規制しかなかった。1983 年までに子供向け番組の CM を規制するコードが独占禁止法違反であるとの裁定をうけて、コードは全面的に停止、削除された。現在は「標準と実践」という緩いテレビネットワーク側の検閲 censorship がある。中身は性描写、薬物、暴力などに限られている。
- (4) E・H・エリクソン、西平直訳『青年ルター 1』みすず書房、2002、序を参照。
(たけうち ますみ)



近況短信：ファンタジーにある「老い」

—団地タクシー奮闘記「さよならだけが 人生だ」の巻—⑪

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのは“ようやく”75歳になったキャリア6年目の老人です。

タクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー(老老)相互扶助の泣き笑い報告です。

ここで「タクシー」と銘打っていますが、電動アシストのついた、重さ100キロ近くある三輪自転車です。人とモノを乗せると自身の体重もあり、かなりの重量になって、ペダルが重くなります。「開業」して10年ほどになりました。

運転手同士の会話です。

「最近、Xさん、乗せた？」

「うーん、そういえば…Yさんも見かけないな」

「Yさんは、長期入院だとか、聞いてるよ」……

こんな会話をよくしています。常連さんですから気掛かりです。あんなにおしゃべりしていたのに、「そういえば…」という時の定かならぬ“お別れ”がすでにあつたのです。

「お世話になりました。明日、〇〇病院に入院することになりました」

「そうなんですか。良くなったら、またタクシーを利用してくださいね。お元気で！」

なんて、会話もなく、風塵のごとく、いやいや風神のごとく、目の前から消失してしまうのです。このときの感覚は簡単な言葉では言い表せません。私の拙いたとえでいえば、大切にしていたお気に入りの風、突然糸が切れてあっちの空へ飛んでいったような、悔しくて、悲しくて、いつか発見されるかもしれないという、淡い期待を胸にしまい込んだ心境かな。遠い記憶の話です。

§

「さよならだけが、人生だ」

井伏鱒二による漢詩『勸酒』の和訳の一節です。有名ですが、いまではあまり口に上りません。私のような高齢者になると、若者に「知ってるか？」と顔をすり寄せて余計なおせっかいをしたくなるものですが、ここは我慢のしどころと心得なければなりません。「人生足別離」、人生に分かれは付きものだ、ということなのですが、それでは私の「風の糸」のたとえと同じであって余韻というものがありません。

「さよならだけが、人生だ」なればこそ、タクシーの常連であつたXさんやYさんのことが偲ばれるのです。

もちろん、元気になって退院する方もいますが、多くは団地に戻ることなく、施設のお世話になる例が多いようです。

あのZさん、いまどうしているのかなー。こちらの男性、団地タクシーで上り坂になると、目の前の把手を持つだけでなく、どういうわけかリズムカルに押してくれます。「よいしょ！」

よいしょ！」と掛け声をかけてくれているようにも見えます。私を気遣って、アシストしてくれているのです。もちろん、そんなことをしてもタクシーが前に進むわけないのですが、ありがたく頭を下げたものでした。そんなZさんも、いつの間にか「消えて」しまいました。

§

この団地の高齢化率は、おそらく東京都内で最高です。

総務省が9月18日の「敬老の日」に合わせて、65歳以上の高齢者の人口推計が発表されました。高齢者は3623万人、総人口に占める割合は29.1%で、過去最高を更新しました。また、80歳以上は1259万人で初めて「10人に1人」に達したということです。

一方、私たちの団地では、65歳以上が59.6%、70歳以上が51.2%と半数以上を占めています。日本全国の水準を、私たちの団地は10年、20年先を先導している「先進」地域なんです。

そんななか、次のような新聞記事（『朝日新聞』2023年9月26日付）に目が留まりました。

「昨秋、鈴鹿市から通知が届いた。『あなたの世帯の生活保護を停止します』」

問題視されたのは、女性の自家用車だ。市は『資産』とみなし、生活保護を受給するにあたり処分を求めている」。

この女性（71歳）は「頸椎症性脊髄症」（けいついしょうせい せきずいしょう）で身体障害者1級、玄関を出てクルマを止めてある駐車場までの20メートルを、足を引きずりながら8分以上かかるといいます。そんな「資産」といわれる「クルマ」を処分することは死活問題です。

吉永 純（花園大教授）さんのコメントが印象的です。

「生存権は、ただ単に生きるだけの権利ではない。買い物をし、知人に会い、余暇を楽しむことは、社会から排除されない権利ともいえる。車という足を奪うことは、社会の一員として認めないのと同じだ」

Xさん、Yさん、そしてZさん、「さよならだけが、人生だ」とするなら、あなたの「人生」とはどんなだったのでしょうか。

地域食堂に「足」を運んだのでしょうか。

自治会などが実施している健康体操に「足」を運んだのでしょうか。

コミュニティ・スペースで会話とコーヒーを楽しむために「足」を運んだのでしょうか。

日々の買い物で商店街に「足」を運んだのでしょうか。

その足を運んだ先で、吉永さんがいう「買い物をし、知人に会い、余暇を楽しむことは」できたのでしょうか。

そんな「人生」のために、私たちの団地タクシーが「足」になっていたとしたら、どんなに喜ばしいことか、ペダルを漕ぐ足（脚）に力が入ります。ただ、乗せて便宜を図っているだけではないのです。「社会の一員」としての「人生」を後押ししているのです。

*「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

つづく

（みやざき あきら）

【ライフ・ドキュメンタリー】

敗者復活ラグビートライの空

—旧友らと二つの会で再会できた十月—

眞島正臣

【はじめに】

私の同世代が高齢者社会の大方を占めている60代、70代、80代である。

二つの集いに参加して、「元気に再会できてよかった」という声を聴いた。

80前半は、100歳高齢者時代の入り口で、勝負はこれからだと話し合った。さらなる超高齢への岐路に立つ男の日々好日を綴った。秋日和続きだった。

1、10月20日金曜日に『わだつみの像と大島渚』エッセイ執筆した

毎週、「要介護支援1」に認定されていることからヘルパーさんが部屋の清掃に来てくれる。午後に来られるが、午前中からヘルパーさんが家事をしやすいように整理をして、下準備をする。リビングの二つの座敷机を整理しろと言われていた。

「市民科学通信」の10月号に執筆のつもりで月初めから資料の「『東洋文庫』展覧会図録を探していたら探し出せた。それはよかったが7月に入院手術した病院の診断書が出てこない。こんな恥ずかしい悩みを抱えながらの半日だった。

午後4時にヘルパーさんが帰られ、立命館大学奈良校友会の『若草だより』という会報の特別寄稿原稿を昨夜から継続して書いていた。題名は『わだつみの像と大島渚』というもので、1932年生まれの大島渚が京都大学法学部時代に大学自治会に参加していた。レットページ以降の時代に、「教授、職員学生の団結によって明るい学園を復興しよう」をスローガンとした京都の3大学を会場に5日間の予定で開催することを決定した」（注1）学生の連合組織と共に活動していた。本郷新製作の「わだつみの像」を立命館大へ運びこんだ後、祝賀デモをし、当時木造だった荒神橋の上で警官ともみあいし、多数の負傷事故が起ったいわゆる「荒神橋事件」の学生のひとりであった。不届けデモが原因である。

昭和36年、立命館大学1回生だった私は、講演会の講師として登壇した大島渚の「荒神橋事件回想談」を聴いたのである。

松竹ヌーベルバーグ監督といわれた若手の地位を蹴って松竹を退社し、あの時は、フリーであったのだろう。私はノンポリで、校庭に立てられていた戦没学生を祈る「わだつみの像」が東大、京大で拒否され、末川総長が受け入れを承諾したという経緯、そのような朝鮮戦争後の歴史も知らなかった。資料によれば、警官200人が出動した荒神事件の裁判があった後に大島渚は、京都大学法学部助手の採用を逸してしまったようだ。猪木正道教授に大島は、「君は法学部教授に向かんよ」と言われたらしい。薄ぼんやりとした鮮明でない記憶を振り返り100字位の原稿にまとめた。

締め切りぎりぎりの提出だったので、すぐに印刷所へ送られた。編集長から原稿内容に関するクレームは、全くなし。

戦後民主主義の気運は、朝鮮戦争を機に戦時期のような政治ムードへ戻ったという。レットパージ後の大学自治は、自由の乏しい抑圧的なものになっていたことなど、「荒神橋事件」を調べたことで推察できたのである。この日は、連続して視聴している NHK テレビ「司馬遼太郎雑談「昭和」への道＝＜江戸の合理主義を失った昭和期の大没落＞」の司馬氏のスピーチにも通じて、納得のいく、若き自分史を遡る現代史理解であった。

2、10月21日土曜日にU高校同期会が難波の百番で開かれた

少し前に連絡を貰ったときから二日間連続の同窓会続きだと、承知していたが当日が来ると、身体に影響がないかとプレッシャーを感じたものである。

現在、これを書いているのは10月23日の午後であるが、テレビでは連日、突如開始されてきたハマスからイスラエルへの武力攻撃により、紛争から悲惨な戦争状態へ悪化していることを告げている。アメリカなどでは、市民の間でイスラエルかハマスかに分断が起り、殺人などの騒ぎが生まれているようである。国内問題では、餌になる樹木の実が不作で、熊が町に降り、人間を噛み殺したり危害を与える被害などが多発していると伝えている。この秋の異常事態真っ只中である。

「日本ラグビー世界に負けるな」、「阪神あと少しで日本一」など人並みに騒いでいるが何が大事が考えると落ち込む。おまえは、どちらを見ているのだと自分を叱っている。行き止りの状況下に個人日常の出来事を書くのをお許し願いたい。10月23日になって、感じている心身に起ったことがもう一つ。大袈裟だなといわれる疲労の事である。

21日は、昼頃にバスに乗り、散髪屋へ行き、帰宅して会合への準備をした。急に寒くなったので、合いもののポロシャツに黒の革ジャケットを用意した。趣味三昧の暮らしをしておることを伝えようと、水墨画の額縁2点と自筆の書道の掛け軸2点をクリーニング屋から貰った大きな袋に詰めた。「マーケティング戦略研究所」の看板を挙げたがビジネスは、依頼者の需要もなく、対策も尽くさず失敗だった。

仕事なく、こんな趣味的ことで「遊んでるんや」と酒の席での余興のようなつもりだった。ところが月曜日、振り返ると、身体に堪えている。首も方も足の方の太腿も痛む。次回のU高校同期会へは、身体に負担をかける水墨画は宴会への持参は、しないと反省。

10月21日は、5時始まりを6時と勘違いし、遅刻した。小説『遅れて来た青年』？ひとりよがりのギャグを吹き、宴会座敷に入った。日頃の暮らしぶりを参加者が順番に立ち上がって話していた。太融寺の町で親から継いだ料亭を切り盛りしてきたY君の「長年のヨットの趣味に打ち込んでます」と話しているのが聴こえた。「次は、お前の番だ」といわれる。持参した水墨画を説明しながら皆さんの前へ披露した。「これは岸和田城の絵です。」「これは大阪の源聖寺坂を描きました。」各人がじかに見たいので回覧してくれといわれた。座がシラケなくてよかったと思った。書道の掛け軸は、「知足常楽」という漢文を書いたものを見せた。私自身は、広告会社時代からのプレゼンテーションで業界間競争を勝ち抜いてきた癖が止まらないのだと内心苦笑した。生まれつきの自己顕示欲なのか。もっと優秀な水墨作品を見せたいのに残念だと悔しがり、性懲りもない。

同期生の中で能力を発揮しづけたS君は大阪府の2000年時代に副知事を務めた男だが欠席であった。大阪府の元職員だったJ君は、「お前は変わりもんやったから将来どうなるのかと思うたで」という。

カメラ屋のS君は、「剣道下手でいつも最後まで残されていたんや。」と何度もいう。それが私の最大の特徴だったに違いない。料亭を廃業したW君は、反対の席から「おい眞島太ったな」と話しかけに来てくれた。嬉しかった。同窓会は自己の原点を再発見できるのかと厳粛な気持ちになった。参加して得るものは、やはりあったと納得した。16名の同期の旧友らは、驚くほど元気だから出席できたのである。余生を悠々自適で暮らしているようだった。同期から副校長になった現役の僧侶に向かい、それぞれが「現在のU高校の学生は、恥ずかしい。もっと学業成績上げられないのか」と詰め寄り、真面目だった。元副校長のY君は、在職中に何度も高校野球で甲子園へ出場させたことが自慢で、その頃は進学校であった。現在は女性の校長で有名な他校の話で酒で赤い顔をした男が声を挙げる。「KS高校がトップや」と孫の世代をよく知る祖父連中の集まりだから、最新情報がすぐさま出てくるのである。元副校長のY君は、戦前のU高校出身で我々の先輩に当たる、司馬遼太郎のことを何度も話した。高校の近況を知らせたら、和紙6枚の返事が来たとか、学校での講演を承諾してくれていたのに病気になり、約束は中止になったとかのエピソードである。貴重な機会だったのに誠に残念だなと私も思う。それよりも愉快だったのは、「学生の成績をもっと挙げてくれ。そうでないと出身者として恥ずかしい。」と手紙に書かれていたという。NHKの歴史語りで「昭和の戦争は、学校秀才でエリートの軍人が集団をなしていたから負けたのだ」という、反骨精神の司馬さんである。U高校出身校の司馬さんがやはり、母校は、頭の良い学生の集まりであって欲しいと本音を言われたのが正直である。次回の同期会の幹事は、毎年1回を元副校長Y君が引き受けてくれることになった。

3. 10月22日、県立奈良大学の七十周年記念式典に参加した

定年前に、退職後、広告代理店にいた実務を若い世代に伝える字事がしたいと、当時、奈良商科大学と言われた、夜間大学へ社会入学した。短期大学から四年制大学へ体制が変わった年に入学した。「中小企業論」のゼミで同じクラスだった大阪市立大学大学院で環境問題を研究してきたTさんが卒業生の校友役員会を担当だったので、早くから今回の70周年記念会のことは聴かされていた。昨夜の疲れで、早起きできず、遅刻した。記念公演は社会学者の吉見俊哉東大名誉教授による「四都論；奈良・京都・鎌倉・東京の歴史地層と地域創造」という一種の「地方再生論」であった。祝賀パーティになり、立食ランチパーティの場で、懐かしい教授にお会いできるかと思いきや全く出席されておらず、お会いできなかった。もう退職されて足腰弱っておられるのかも知れない。現役の先生方は、おられたがこちらが存じ上げない。パーティにいた人々は圧倒的に高齢者が多い。短期大学から四年制へ移行した当時は、社会人が多かった。現在は、夜間がなく昼間のみの大学に変わっている。何か個人的思い出を持って帰ろうと乾杯の発生をした元地方議員のM君に、偶然、目の前へ来たから訊ねた。大学からの視察旅行でオランダへ行ったときに見学先の大学で「投飛ばされたことを覚えているか」と問うたのである。オランダで一緒にいた女性の仲間Yさんが知らない間に、立話しの横へ入ってきた。あのとき私が投飛ばされたことをこう言って成敗した。「眞島さんは勝手に何かわからんけど怒って突っかかっていくからや」と喧嘩にならないように笑って収めさせてくれた。「俺は覚えていない」とお惚け政治家であるM君。さっと逃げていった。シャープの貿易部で英語能力を発揮したH君や建築会社を営んでいたN君らの仲間に入れてもらい、一泊旅行へ出かけていた。H君は出席していない。N君の顔も見えなかった。寂しい思いがした。

県立大学は現在、隅々までリフォームされ、若々しいキャンパスを創り出している。

校庭から秋晴れの下で生駒山が見渡せるのは、キャンパスが高台の立地に広がっているからである。現在の学生らの学問への取組に触れることができないので確かなことは言えない。私は、この日、奈良県立大学の将来性に期待を掛けた。引退された前奈良県知事はこの大学に工学部を新設することを提案されていたという。新しい山下知事は、財源を理由に反対されているという。技術職を育てる場として、都心の通学に便利な場で工学部は賛成である。

4, 10月24日富雄南イオンショッピングセンターへ。駅前へ戻り、主治医からワクチン接種を受ける

三段重ねの重箱を連想させるような一日だった。午前中は、介護保険の恩恵を受けるべくあやめ池のトレーニング施設で健康管理のスポーツをした。昼間は、パソコンのプリント用紙がないので、イオンショッピング施設の一角にあるDIYの店を目当てに出かけた。普段は大阪難波のダイキンへ行くのだが、夕方、ワクチンの接種の予約が決まったので来てくれといわれていた。日頃、出かけない、旧宅の街へ足を踏み入れると、かつて、お世話になった民生員役の町内自治会の奥さんに偶然であった。貧困で困っていたからでなく、独り者だから見回りにこられたのである。こんな再会は、どうゆうことだと驚いた。心から感謝の気持ちを忘れるなという仏の戒めかと思った。奥さんは私の方に手をかけてキャーと言われた。御主人を存じ上げないので、先に歩かれて、立ち止まりことらを見ておられる。この街の住民だった頃に建っていたバス通りの角の住宅二軒が新しい豪邸になり、名前も変わっていた。その角から少し目える私の旧宅も当選ながら新たに建て替えられ、かつての面影はなかった。離れた位置から瞬間に確かめたのみで、他人の住宅になった元のわが家を見るのは忍びなかった。漂流者の心境である。昨日出かけた奈良県民大学も生まれ変わったかのように新しくなり、自分にフレンドリーな居場所だと思えなかった。旧宅を近くのイオンショッピングセンターを取り巻く街も様変わりして自分には、心動かされなかった。現在、学園前駅周辺を生活圏としている私には、何もかも広すぎるエリアだと思った。

学園前へバスで戻り、駅に近い医院の予約時間まで、待機しないといけなかったのでマクドナルドの店へ入ることにした。NTTのスマホ販売店だった場所をリニューアルした店内は、広々として居心がよさそうである。新聞を片手にバーガーを食べて三重の重箱の最後の一つ、医院へ行くことになる。A4のコピー用紙はバッグの中に入れたが重い。ワクチンが終われば、気分悪くなるといけないからタクシーで帰ろうなどと、今日一日の終了の事を考える。

ワクチン接種の後の夜は、静かに暮らそうと夕食も少量にした。ベッドに入ると、旧宅のあった街が蘇る。第二阪奈建設反対運動を自治会の役員だったから継続した。イオンショッピング施設が建設される前の田園と矢田丘陵が迫って見える散歩道を愛していた。過去の追想世界になった。住んでいた頃から不愛想な酒屋の息子が店の前に立ち、不審者を見るように見ている。モノクロの風景写真のように妄想された。ニュータウンとして開発された住宅地は、秋晴れの午後埃っぽく記憶されている。

(注1)「学園復興会議と「わだつみ像」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%92%E7%A5%9E%E6%A9%8B%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

【エッセイ】 MGC 2023

照井日出喜

2023年10月15日の東京は、映像で見る限り、少なくとも午前中は、篠突く雨が間断なく地上を叩き続けていた。その冷たい雨のなか、国立競技場をスタート&ゴールとして、パリ・オリンピックのマラソン派遣選手を、男女それぞれ2名ずつ内定するMGC（Marathon Grand Championship マラソン・グランド・チャンピオンシップ）のレースが開催された。

「通信」2023年1月号の「女子長距離走者の夢」で、わたしは「同郷」の第一生命所属の鈴木優花さん（といっても、彼女は5～6年前に現大仙市の大曲高校を卒業したばかりであるのに対して、わたしは数世紀前に彼の地の中学を卒業したという、無限の違いがあるのだが）についてのエッセイを書いているが、その優花さんが、いささかわたしの予想を上回って（!）MGCで優勝し、来年の夏、パリで世界の強者たちと一戦を交えることになった。

24名の選手たちによって争われた、今回のMGC（激しい雨のなか、沿道からは多くの人びとの大きな応援の声が飛び続けた）の女子の部の勝負について、わたしは、「旧世代」の三人——4年前のMGC及び救済措置を経て、2年前の東京オリンピックに出場した、一山麻緒（資生堂）・鈴木亜由子（日本郵政）・前田穂南（天満屋）さん——と、「新世代」の二人——ともに24歳である加世田梨花（ダイハツ）・鈴木優花さん——との戦いとなることを期待しており、「新世代」の二人が、どこまで「旧世代」の牙城に楔を打つことができるか、それがポイントかと思われた。マスコミや所属するチームのHPからは、「旧世代」の三人も着々と準備を進めており、たとえ百パーセント万全な状態までにはいかなくとも、前回のオリンピックで味わった苦い悔しさを胸の中に引きずりつつ、おそらくは最後のチャンスとなるであろうパリに向かって、故障や不調を乗り越え、凄まじい重圧に耐え、苦しいトレーニングを積みつつ闘争心を燃やしている様子が伝えられていた。

「新世代」の加世田さんは、8月のブダペストでの世陸（世界陸上）のマラソンに出場したものの、残念ながら猛暑のなかで失速し、それゆえ今回は、当然、リベンジを期して走ることは明らかであった。一方、優花さんは、今年5月の東日本実業団陸上選手権の5000mに出場して以来、おそらく国内の大会や記録会にはほとんど無縁なままであり（7月8日の網走での「ホクレンディスタンス」でも、10000mにエントリーしていながら、鈴木亜由子さんともども欠場であった）、しかも、マラソンは今回が3回目で、初マラソンは大東大卒業間近の昨年3月、学生新記録を出してはいるが、今年3月の名古屋ウイミンズ・マラソンでは、昨年10月の「プリンセス駅伝」以来の長い故障期間を経て6位に入賞はしたものの、疲労困憊でふらふらの状態でゴールし、医務室に担ぎ込まれたほどであった（わたしはこの時の彼女の姿を映像で見て、「パリは無理かな・・・」と思っていた）。

優花さんと加世田さんとは、それぞれ大東大と名城大という、学生時代には駅伝でしのぎを削ったチームの出身である（「シルバー・コレクター」と揶揄された——揶揄される——大東は、当時つねに名城の軍門に降って2位であった）。「因縁の対決」などというほどのものでは、もちろんなく、両者ともそのような意識とは無縁であろうが、2019年7月の美しいナポリでのユニバーシアードのハーフマラソンでは、二人の間で激しいデッドヒートが繰り広げられ、優花さんが金メダルを得ている。いずれにしても、現在はこの二人がそれぞれの実業団チームに所属し、日本を代表するアスリートとなるべく、MGCでオリンピックへの出場権を争うにいたっているということである。

前述のように、今年に入ってからレースの実績からすれば、優花さんにはほとんど目立つところはなかった。今回のMGCのレースの後、瀬古利彦さんは、「彼女（優花さん）はダークホースにも入っていなかった」と「正直」に述べたが、じっさい、彼女の自己ベストは上の5人のなかでは最低（2:25:02）で、持ちタイムと今シーズンの実績からすれば、彼女の勝利を誰が予想し得たであろう（一山：2:20:29、鈴木（亜）2:21:52、前田：2:22:32、加世田：2:21:55、さらに、ワコールの安藤友香・エディオンの細田あいさんは、いずれも21分台の記録を持ってい

る)。わたしは、大会の前日、とある文書に、「『ゴボウ抜き^{ゴボウ抜き}の優花』の異名を取った学生時代同様、後ろからライヴァルたちを次々に抜き去って、ゴールは20分切りでパリを射止めて欲しい」と、「同郷人へのせめてもの願望」(!)を書き記したのだが、その「淡いはずの願望」は、じっさいのタイムを除けば、「期せずして」実現することになった。「伏兵、MGCを制してパリへ赴く」というところである。第一生命の山下佐知子監督のもとでの、長期に渡る夏の海外合宿が功を奏したには違いない。

レースの前半は前田さんが全体を引っ張り、やがて23km過ぎから一山さんが細田さんとともにスパートして集団から抜け出すのだが、時折り映像でアップされる優花さんの表情は、つねに変わらず、淡々と、もしくは虎視眈々と、ほとんど練習で走っているかのような感を与えた(もちろん、雨に打たれ、風に吹かれ、水しぶきを浴び、駆け引きをしながらのレースなのであるから、疲れていないはずはないのだが)。38kmで先頭の一山さんに並び、39kmで事もなげに追い抜いた後、ゴール前、かなり急な坂が待ち受けているのであるが、その時の前傾姿勢や脚の運びは、かつて大学時代の「富士山駅伝」の第7区の「山登り」で、多くの人びとを驚嘆させた走りを思い起こさせた。

激しい雨のなか、ともかくアスファルトが滑ること(じっさい、二人のランナーが折り返し地点で激しく転倒している)、体が冷えて固くなり、走るリズム自体が狂うこと、さらには、シューズが水を吸って重くなり、足の感覚が変わること、といった悪条件のもとで、優花さんの優勝タイムは2:24:09、2位の一山さんは2:24:43にとどまり、わたしの幻影のなかの「20分切り」を果たすことはできなかった。しかし、「世界」は、女子でも現在は2時間15分を切る戦いとなっており(先日は、2時間11分台の記録が出た)、21分とか22分では、じつに2km以上の遅れを取ることになる。5000mを14分台、10000mを30分台で走る記録をコンスタントに出し、40kmを過ぎてからの2.195kmを6分台のラストスパートでライヴァルたちを叩き落として突っ走るほどの走力がなければ、オリンピックでのメダルはない。アスリートの「存在理由」は勝つことである。相手が誰であろうと、ただひたすら勝つことである。つまりは、優花さんたちは不可能に向かって挑戦することになる。

MGC 2023 結果(4位まで)

1位 2時間24分09秒 鈴木優花(第一生命グループ)

2位 2時間24分43秒 一山麻緒(資生堂)

3位 2時間24分50秒 細田あい(エディオン)

4位 2時間25分29秒 加世田梨花(ダイハツ)(注)

(注)パリへの女子マラソンの派遣は3名であり、残る1名は、「MGC ファイナルチャレンジ」として、来春の「大阪国際女子マラソン」か「名古屋ウィメンズマラソン」で2:21:41を越える最速の走者、となるが、そのタイムを越える走者がいない場合には、今回のMGCで3位の細田さんが内定する。

【後記】東京世陸(世界陸上)は2025年であり、それに向けての準備(年間トレーニング計画)はすでに始まっていることであろう。次回のMGCは、制度が変わらなければ、2028年のロス五輪に向けて2027年ということになるが、その時には、優花さん、加世田さん、第一生命の優花さんの同僚の小海遥さん(現在は故障中)、拓殖大の不破聖衣来さん(現在は故障中)が、鎬を削って争うことになるかも知れない。長距離ランナーにとって怪我や故障は不可避のものであるが、たとえ患部自体は快癒したとしても、たとえば、2000mを短いインターヴァルを置いて10本、最後にスピード練習として全力疾走で400mを3本、月間1000kmとか1300km走破する、などという、およそ常人ならば生きてはいない練習を積んでレースに出場するまでには、数カ月、もしくは数年を要することも稀れではない(後者の場合は、実業団、つまりは企業がそれを認めるほどの実績がある場合に限られるであろうが)。いずれにしても、将来が囑望される小海さんや不破さんが、来年中にはレースに復帰できることを祈るのみである。

(てるい ひでき)